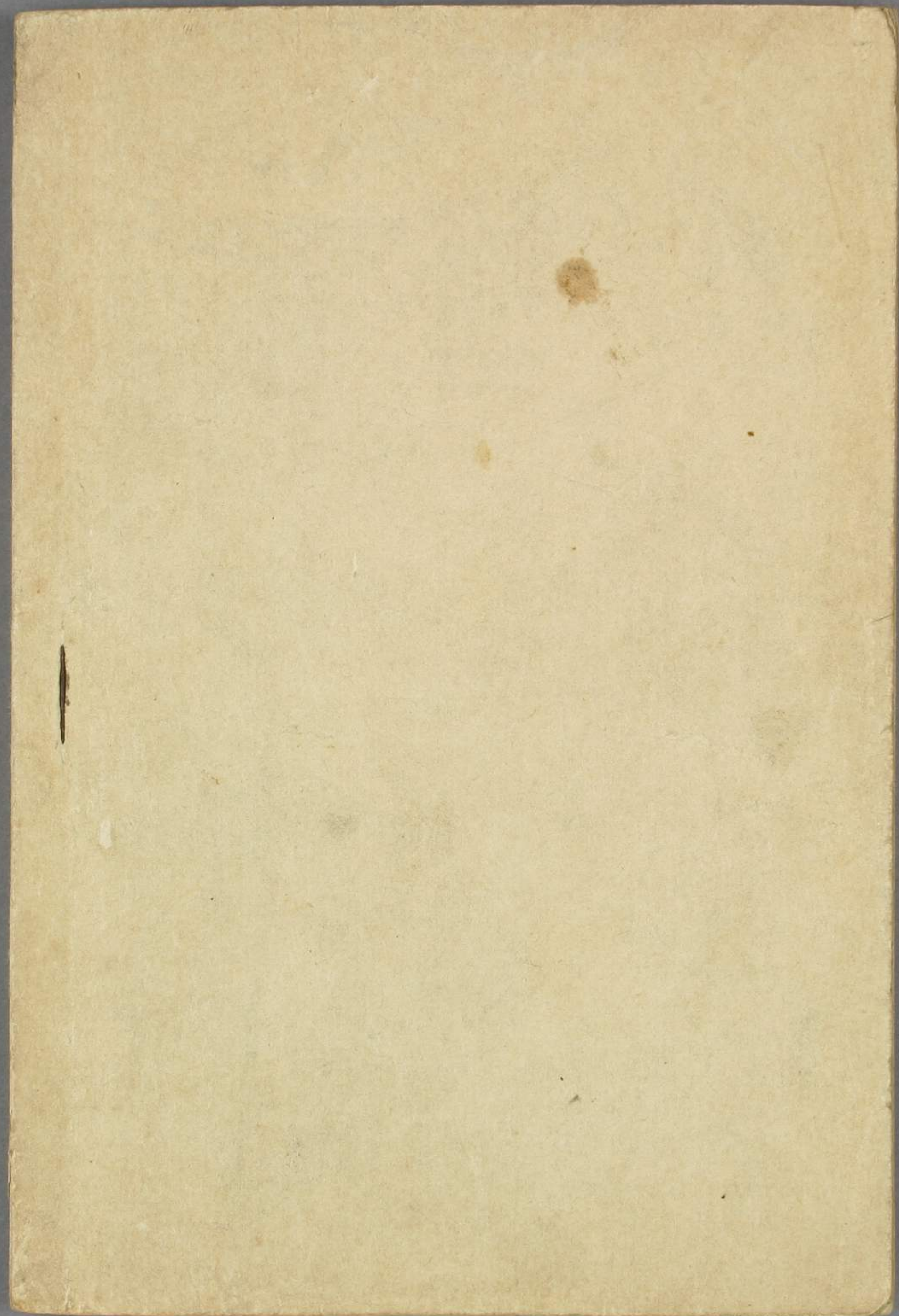




黑瞳子著  
 新派  
 和歌評論  
 鳴率書院發行







第拾五号



はしがき

作者と讀者とが其歩調を同一にして進むものであるか如何にと云ふ事は暫く疑問として、尠くとも讀者の七分通りは、作家自身の手から作物を受取るのではなく、必ずや中間に立つ人に因つてそれを紹介さるゝのである。吾人が今分を忘れて此取次役を自ら勤め、新派和歌を一般に御渡しやうと企てた此仕事に就ては、種々物議も起る事であらう。

第一新派和歌は未だ圓熟したものである。云はゞ未製品である。讀者が如何に盲でも、未製品を引渡しされては甚だ迷惑すると云ふ事と。第二は、現代の作品を直ちに斷りなく取次して人に渡すなど、は、以つての外のことであるとの苦情とで、之はむしろ作家の側に多からうと思はるゝ。

吾人は今一々之を強ひて辨解しやうとは思はぬが、未製品なら未製品なりに、一點の妙所があつたなら舍つべきでないと思ふのが、眞に藝術を愛する人の本分であると思

する。まして藝術の上の圓滿とは何時の世誰の手から作らるる事であるかそれは、千古の秘密であらう。もし夫れ作家の苦情の如きに至つては、未だ其作物を公にせざる時に於て起るべきもの、吾人は其等の言を顧みる必要はないと思ふ。只幾重にも心咎のせらるゝは、未熟の筆を以つて金玉の作品を傷けた事、卑い識見を以つて評言の完全を損うた事とであるが、之は豫め今より謝辭を表して置く。

## 新派和歌評論

黒 瞳 子 著

我男の子意氣の子名の子劍の子詩の子戀の子あゝもたえの子(與謝野鐵幹作)

之れは與謝野鐵幹子の詩集「紫」に於ける巻頭第一の歌である。

この歌に就ては随分種々の非難を耳にしたが要するに大胆粗豪の詠振りである。一體詩と云ふものは如何なる型スタイルを以て立つ可きものか、それは永久の疑問として、兎に角大方の定めた標準に随つて立論すると爲やう。

和歌が詩である以上は、るれに要する凡ての條件を具へて居なければならぬ、とは當然の理由で少しも否む可きでない。が其定規を直ちに此歌にとつて見ると、それは修辭も亂暴なれば技巧も頗る欠けて居る、又ふむ所の内容云つても唯だ露骨に文字通り格別の詮索も要せぬのだから、詩としてはあまりに淺薄すぎる、などの聲は起るで

あらう。或は一層酷く、新派の和歌なるものは凡て斯様調子であるか、とまでこれ一つの引合に出されて、攻撃の好材料となるやも知れぬ。

併し自ら詩の領分を狭めて了つて、春の花は櫻に限る、夏は納涼、秋は紅葉、冬は雪中竹、と云つたやうに限つたのなら又話しは格別となる、でない以上は「詩」は天地の詩である。魚が海や川にばかり棲まない以上は人間の詩も全くとく櫻や紅葉に限られてはあらず。と敢へて云ふまでもない事である。

再更に譬ひて云へば、マイダスの貴金政策とやらで、手水鉢の水までが黄金であつた日には、あたら其黄金も何等の役に立ちませまい。品位と云ふ容儀と云ひ、笏と云ひ、烏帽子と云ふ、それも時と場合である。大禮服でなければ博覽會は入場出来ないと思し、定つたら裏店の細君や、横町の八公は生涯、珍らしい物は見られず死了るであらう。

偕て順を追うて現に來る歌は凡て舊歌の人達が眉を顰めらるゝものゝみであらうが、敢てそれは斷はつてれく、又それを避ける處でもな。

茲に至つては流石に俳句は進歩したものだ。子規子が嘗て自ら俳句二十四體を作り出したを初め、今日の俳壇はあるかざりの手を擴げて、得らるゝ丈の材料を蒐集して、雄渾でも繊細でも悲壯でも滑稽でも、苟くもそこに採るべき一點の詩趣ある以上は、決して捨てはしない。

長き夜を月とる猿の思案哉

子規

之を面白いと云つて珍重すると同時に

曉の冷かな雲流れけり

子規

を神韻ありとして賞賛もする。

短夜を蚤の夫婦の分れ哉

紫影

蚤の夫婦をまで詩化させて居るではないか。

鐵幹子の此歌は前にも云つた通り、藝術上の價値は少ないが、之が詩集「紫」の卷頭だと思つて誦んで見ると、又其作者の面影があり〜と三十一文字の上にはあらはれて居る。古來作者が感懷を舒べて無限の情趣を謠うたものはいくらもあるけれど、かほど

大膽に、かほと直截に己れ自身を詠じ出したものは恐くはなかつたであらう。馱法螺でも構はない、獨よがりでも敢て問はぬ、男子が濶歩して活事業を爲す時に當りては、只「自己」あるのみで、虎の鐵幹、自我宗の本尊など、毒口を叩く暇で、尙一つ見て貰ひたう。

情すぎて戀みな脆く才あまりて歌皆奇なり此子あはれめ（與謝野鐵幹作）

之が必ずしも、鐵幹自身を云ふのであると思はず、客觀的にこんな男があつたら如何であらう。日本などは古から此型スタイルに簞はたきまるものはなかつた方で、業平などは戀みな脆い程情がすぎたであらうけれど、「歌みな奇あり」とはまだ云はれまい。「古今集」に因つて和歌の形が固定し、師範家によつて和歌の領域が狭ばめられて、堅苦しいものおとなしいものと云ふ考が、始終歌人の頭にあつたからでもあらうか、三代集以下「新續古今」に至るまでは勿論、文藝復古の徳川時代でさへ、「奇氣」のある歌は見る事が出来ないであつたから、此歌の四句にあたる人は日本に求められないとして、西洋ではバイロンなどが、恰當の簞り役であらう。此歌も歌としては左程の價値はない方

である、「此子あはれめ」とは思切つた云振だ。之れとは少し違ふが。

誰にもあれ手枕かさ子のほしき此秋風のさくに堪へぬよ（窪田通治作）

我心覺束なくもなりにけり誰ぞ〜早く如何にとかせよ（服部躬治作）  
など、同情を求むる點に於て同じである、

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる（古今集）

古人は「驚かれぬる」など、云つては居るが、歌の様子ではあまり驚いた模様もあらはれてない、之れがどうも技巧を尙んで打ちつけに感情を云はなんだ結果であらう。「手枕かさん」子やあると叫んだ詩人の懊惱が想ひやられて、讀む我々も同じく引つこまれる様な氣もせらるゝのである。元來此歌、は「誰にもあれ」と云つて先づ重い調子に云ひ出して來て、「手枕かさ子のほしき」と曲折のある詞を以つて受けたから、調子がズーと長高たかくなつて、能く下の句に應じ得た所が作者の手柄なので、通例ならば「子はなきか」など云ふべきを、「子のほしきと」活きた語をもつて來たのも又佳所えいじきである。



服部氏のも「我心覺束なくもなりにけり」と云つて、「さびし」とか「詫し」など、有ふれた詞がなかつたので一層の新しみが見えて居るではないか。しかし下の句「たゞく早く」はあまり好ましい句ぢやない。

我世をば思ひわづらふ柴の戸に梅が香寒き片われの月（金子薫園作）

薫園子の歌は清新でもあらうし、温健でもあらうけれど、此歌など少しは得意な作である相ながあまり感服はせぬ。此前までののは心の寂寞を慰めん爲他に同情を表してくれる人を求めると云ふ内容で、其懊惱の状態からどんな性格をもつた人が同情したら、作者は喜ぶのであらうなど、多少立ち入つた想像も出来る、之が新派和歌が描寫に精細なる點であると共に新らしみと云ふものも加はつた所なのである。然るに只「我世をば思ひわづらふ」など漫然たる云下し方は決して珍らしい句法ではない、うして第一「我世をば」の「をば」からはじめ拙い云ひ方だ。

つらかりし憂かりしやみの手はちれて我世樂しき朝はらけかな（服部躬治作）

之れも「我世」を諠うて居る、夜の暗黒を去りて朝の清き光に浴するを喜びて、諠うた

之が作者の真情であらう。全體此作者は自ら煩悶のない者は煩悶らしい事を云ふものでないと云つて居る人で、しかも自分自らはあまり煩悶のない人であるとの話だ。

見おろせばまなこくるめく谷陰の底おろろしき世にこそありけれ（佐々木信綱作）

此人の調子は新派歌人中最も平板なもので、「ありけり」とか「つる哉」などを最も得意とせらるゝのである。そして此様に我世を恐しい世なりと云ふかと思へば又

谷ふかく見ゆる一つ屋こゝにてもあればあらるゝ此世なりけり（佐々木信綱作）

牛を追ひ牛を追ひつゝこの野邊に我世の半ばはやすぎにけり（同上）

など悟りすました事を云つて居らるゝ、或人が「佐々木さんは歌で理窟を説いて居らつしやる」と云つてたを聞いた事もあるが、かう露骨に斷はられては少々避易もしやうぢやあるまいか。けれど此理窟はまことに平易で簡單で、心學者がよく引合に出す、「道歌」とか云ふものに多少似通つても居るから、杓子定規よ美不美を論ずるのは別として、和歌を社會的に應用する時の料に、此人達の作物を用ひたならよからう。現在和歌を、香、花、茶の湯など、同列にして、姫御前達がお嫁入前の修養に遊ばす時な

どに、この様なのがお爲になると見え、竹柏園には女のれ弟子が多いとか聞いた。

牛に似ておのが歩の遅くとも行くべき限り行かんとぞれもふ（佐々木信綱作）

名にきゝてきゝれぢしつる大山ものはれば左のみけはしくもなし（全上）

こゝらで勵を起して多少自暴自棄の境遇より逃れ出づる動機を與へる事もあるであらう。

眼にあてゝ涙のどはん花もあらず我世のさだめさびしき夕（窪田通治作）

新派歌人は多くは若い未だ青春の胸に燃えてる人達が多いので、澤山經驗を積んだでなし、何程の人生を味つたと云ふでもないから、自と四季の詠物や、戀の歌はある割合に、眞の人生の意義に觸れた作物に乏しいのである。此作者とてやはり青年詩人ではあるが、此人の詠み振りは全く他の儕輩と異なる所あつて、先づ第一調子が沈痛で着想亦従つて沈痛である。之れ等も追々評論して行くつもりである。

うらみ詫びこの世に瘦せし少女子の低きしらべを厭ひますな君（増田まさ子作）  
戀故にこの世をうらみわびたのだ。又

二十年の我世の幸はうすかりきせめて今見る戀安かれな（鳳晶子作）

此女史の作物に就ては之から續々評論をして行かねばならぬので、それには此歌などは物足りないのである、で今は只「我世」と云ふ語の使ひ方丈を云つて見やうと思ふ。もとゞ我國は一語で數様の意味をもつて居るのが多いので、同じ「さびし」と云つても、親が死んでさびしいのか、子があいでさびしいのか、秋風がさびしいと云ふのは只秋風がさびしい丈にとゞまるのか、場合によりてどうにでも用られてゐるで秋風の吹くにつれて世の運命の果敢さを嘆いたのは此前にあげた窪田氏の詠んだ所で、見渡す限り末枯の草かなしう、ざわゝと吹き立て來る秋風に、せめて涙を拭はん花だにもあらばと謠つて居るに引きかへ、此鳳女史のは、二十年までの我世に於ける幸福は薄いものであつたが、其代はりとして今の戀の安く平和に遂げん事を望んだので、つまり二十年の今までは情ある人の情を得られなかつたのを、「我世の幸はうすかりき」と云つたのである。「我世の幸」が薄いものなら「さびし」に極つて居るのだから、つまり「二十年の我世さびしき」と云つても同じ事にはならうけれど、「さびし」と

云ふ語を一層悉敷説明した爲に、此歌に活氣が生じて來て居る。

よき音其鶯籠のせはきにもいきとほろしき我世となりぬ（與謝野鐵幹作）

茲の「我世」は亦特殊の我世が謠はれて居る、因循で卑屈で引つ込み思案で、科學的に云へば厭世的、消極的思想を充たされて居た、從來の短歌界に波動を起させた、鐵幹子の歌だから、普通逃支度をして「わびし」「さびし」など弱い音をだして居る時でも、「いきとほろしき我世となりぬ」など、力んで居るので、が此人の特調である。うして今までの死に別に戀に運命に、我世をさびしと云ひ我世の幸の薄いのを泣いてるのよ、此歌は、佳ひ聲の鶯をせまい籠に入れて置く——あたら天才を埋めさせてしまふ——我世の愚さに憤つたので、之を積極的の涙とでも名づけやうか、何にしる一風變つた吟懷である。

みんな内容で謠はれたのは無論古歌には絶無であるが、今人の歌にもあまり多くは見當らない。尙此事に付ては「明星第十三號」に鐵幹子が論じて居るが今は其舉げて置いた歌丈を抜いて置かう。

我笛を門にのこして人をまつにひろひし人も亦すてゝ去る（中山梟庵作）

酒をあけて地に問ふ誰か悲歌の友ぞ二十萬年此酒冷えぬ（與謝野鐵幹作）

山の巖になさけありきと云ふ歌よ幾とせたゝば人拾ふべき（同上）

我歌をあはれと云はん人ふたり見いで、後に死かんとぞ思ふ（落合直文作）

思はず話が横道へ外れたが、も少し、「世」と云ふ事に付て論じて見たいので。

勇ましき夏の遠海雲されぬをしく晴れよ今は汝が世ぞ（篁碎雨作）

春にがき貝多羅葉の名をきゝて堂の夕日に友の世泣きぬ（鳳晶子作）

之等の「汝が世」「友の世」などは亦珍しい用語である。元來此「世」と云ふ語に二義あるので、一は即ち普通世の中とか世間とか云ふやうな義、一は生涯とか、得意の折とか云ふ様な場合を意味して居て、何れも和歌や美文で使ふ計りでなく、日常の言語にまで使ひ分けられて居る。碎雨子の使つた「汝が世」は第二義「得意の時代」と云ふ意で、夏が來れば海よ此世の中は汝が物であるぞ、と云つたやうな具合。鳳女史のは友の生涯若しくは一代の運命など、云ふ程に用ひられてゐる。

序乍ら鳳女史の歌は解り悪いと云ふ人もあるから少しく私見を述べて見やう。うれには先づ貝多羅葉なるものの性質を明にする必要がある、いろは辭典で見れば此木の葉は古昔經文を彫るに用ひられたものである相な、で「堂」とあるから何れ寺院に居る友達があるので、作中の主人公は其友達と堂の椽端にでも腰かけて夕日の前に話して居たのである。と見ると友の手に一葉の貝多羅葉をもつて居るから、うれは何と云ふものであるか、何にするものであるか、など問ひかけて、いろ／＼此葉に關する話を聞乍ら、はしなく友は行末出家となり桑門に一生をはつべき人である事を思合せて、そゝる其生涯の寂しく味氣かいのに同情されて、夕日の前に友を泣いたと云ふ。裡面に多少の戀は含めてあるが大意はさつとかうであらう。そこで春の日の厭に氣壓の下つた押しつけられる様な日和を云つて「春苦き」とした事や「貝多羅葉の名をさうて」と云ふ詞の洗鍊して居る事などは、何れ此女史の伎倆を論ずる時にしやう。

妹が世も我世もしれと根こじきて植ゑし小松によき名おほせん（服部躬治作）  
平和なる家庭。しかし此處の「世」は客觀から云うたので今までのとは違つて居る。

麥まけば麥予生ひたる粟まけば粟ぞみのれる世の中の道（佐々木信綱作）

因果應報は佛説であつて誰れしも云つて居る處だが之を短歌に説明したのは之が始めていあらう、例の理窟を云はずにまわ誦んで見ると、田園のものを藉りて具象的に句をやつたから、どこか清新で厭味がぬけてゐる。尤も聖書の中にもこんな風の云方をしつてあつた様に思ふが、我に其聯想が伴つて居る爲めで、もあらうか。とまれ、麥まけば麥予生ひたる」と云ひ、「粟まけば粟ぞみのれる」と云ふ、新らしい句法と云ふべしだ。わすれじなわすれ玉はじさはいへど常のさびしき道ゆかん世か（山川とみ子）  
明星誌上一時鳳女史と并稱されたる山川女史の歌で、頗る脂氣多い作である。先の「世の中の道」は世間の道理と云ふ事を指し、この「道」は世間の道德を云つたので、歌柄に違ひある如く道の意義にも違ひある。

君により見ぬ戀謠ふ若き子に許せ許させ道を外にして（鳳晶子作）

やわ肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道をとく君（同）

之れ亦戀の際とい處まで云つた歌で、此道も同じく世間の道德を指したのである。尋

常繩墨を度外にして戀の成らんを祈り、和肌の熱き血汐にふれても見給へど道德家を一笑したる處、之等が女流作家として頗る生意氣なりとの批難を受ける點であるのだ。道德對藝術の問題は仲々一朝にして盡きはせまいが、つまり程度問題であらう。しかし茲に忘るべからざる原則は、藝術は道德を拒むものにあらず、さりとして道德を要求するものゝあらず、と云ふ事なので、固より女史等の作物を目してマサカ背倫理であるなど、極論するものもあるまいから、此問題もくわしく茲に持出す必要があるまい。只生意氣だと云つたら或は生意氣かも知れぬ。

下京や紅屋が門をくゝりたる男かわゆし春の夜の月（鳳晶子作）

醉になく乙女に見ませ春の神男の舌の香にかするとき（同作）

女流の身としてあまりに仿はたないとも思はるる、うれに之等が何も女史の作物に影響を與へる價值のあるではなし、なせこんちのが「みだれ髪」の中に組込まれたであらうかと、頗る訝しく思ひ做さるゝので、同じ事でも

春はたゞ盃にこそつくべけれ智慧あり貌の木蓮や花（鳳晶子作）

などなら、想に於て形に於て採るべき點がないでもないし、作物と作者とを別々にして見て、男子の作として、否いつそ作者の誰れたるかを問はない事として見たら、何も生意氣だとか言過ぎだとか云ふ程のものでない。殊は「智慧」と云ふ字を使ひこなし、木蓮や花と云ふ特異のや文字を使つたあたりは、獨創の才が横溢してゐるではあるまいか。

「道」の歌。

世の道のそは親もてる幸人のつくれるものを我はようなき（窪田通治作）

前と同じに道を排してはゐるが、彼は戀故に排せんとし、之は親のない故に此激語を放つと云ふ、二者どうしても銘々の領分を守つてゐる處が面白い。

思入りし今日や聖の道もちし夢に誰が世のまどひを引かん（平塚紫袖作）

男の子われ我に罪うつ腕あり道のねもてに人高ぶるな（有地紫芳作）

今度は道を求むる方だ、技術丈なら先の方がまさつてもゐるであらうけれど、紫袖子の現在いまは飾りすぎて困る。「夢に誰か世のまどひを引かん」……何もこゝへ夢など持ち出

さすどもの事、紫芳子のも初五文字好句ぢやない、が、「我に罪うつ腕あり」……しつとりした調子であるのを、道のおもてに人高ぶるな」と云ふ様な強いもので受けたから、想に相當して大丈夫な形がとつて來た。

我ちらで先づ知りし子のすたれずやあらぬ反古にも道したはしき（與謝野鐵幹作）  
道をしたふにも之れは藝術の道である。天才の不遇は現世の常であるから、もし埋れた才人が我よりも先に見付けて置いた或る藝術上の卓説があるまいか、と、あらぬ反古にも注意して見ると云ふ、まこと藝術に渴仰する人の用意の一端を謠つたので、又左程の才人が一代の風尚にあはないで知己を千載の後にまつ積りに、書殘して置いたものを。もし自分の粗勿から見出さずしまつたら、甚だ其人に濟まざる譯でもあり、且其人が地下に居て何程残念に思うであらうと想ひやつた、頗る摯實の歌なのである。贅を云つたら「我ならで」の句が疵であらう。

何と云ふ處か知らず思入れば君に逢ふ道美しき哉（山川とみ子作）

此道は道路の道である、假初に相約した處なので其場處の名も様子も知らぬが、逢ふ

嬉しさに一心こめて迎れば其道のさても美しい事よと。……「道美しき」と云つても只何となく行手が望まれて足の運びがれのづと早い事を形容したので、道の兩側に何か花でもあつて美しいのだらうなどは、理窟詰の解し方である。

とかくしてふとひにたゆまれつ迎るに我の道うつくしき（有地紫方作）

いくらか「まほろし」派に近い歌である。あまりかう行手の道に光明がある——現に光があつて耀いて居ると云ふのではない——ので、望もない今の我にはさう美しい道ではない筈だがと、ふと思つてたゆたひた其瞬間の情を謠うたのであらう。尤も「とかくして」どの初五の用ひ方があまり明瞭ではないから、尙他にも解し様もあるけれど、要するに大體の情は前述べた通として差支はあるまい。之れはひとり道あるくとき計りでなく、日常我々がよくある事で、何となくいそ／＼して氣が引立つから、さてはどうしてかう今日は心嬉しいのであらうなどと、獨り自ら怪しむ事なごある其情を茲に謠つたので、一寸した事ではあるがなか／＼すてがたい詩趣がこもつてある。「ふとひ」の文字は、古くにもないではないが、盛に用ひ出したのは明星派である。

服部氏も「山鳥の水はありやの」と云つてあるけれど「迦具土」中此外に二三首あるのみだ。

ほこらしく其手とらん。誰かある（窪田通治）

にくらしの思は見るにやまぬ哉（同上）

山いづこへの月ねぼろ〜（西島南峯）

など皆同じ。

新墾の村の中道。いつの朝もわがせまづつく草鞋の跡（服部躬治作）

我せこよ我を思は、今日のみは馬に鞍れけ霜とけの道（同上）

夫妻の情を詠じて真情あるもの、

紅の裾ひきなせる露原の戀の中道。月は出でにけり（同上）

作者はどうしても叙事詩人である事は、之れ等でも分るので、「君に逢ふ道美しき」を云ふ抽象的主観は「迦具土」の中に求めて得られないのである。

鎌倉の松葉がやつ。道のべに法をときたる日蓮大菩薩（讀人不知）

高時の滅びし處義貞の打ち入りし道。を繪圖にて語る（同上）

之は根岸派同人の作中から抜いたものであるが、作者の名前が分らぬ、是までに根岸派に屬する人達の歌を引いた事のなかつたのは、何か偏頗の考でもあつての事かと、邪ひがまれるも不本意故少し辨じておこう。

誰れも知つてゐる通り根岸派と云へば正岡子規子の幕下に集つて居る一團體で、客觀を尙び叙景を唯一とし、盛るに古語と古調とを以つてして、明治の和歌に革新を與へんと云ふ主張であるのだから、叙情の方面にのみ筆が入つて居る時には勢引くべき歌がむしろないと云つた方がたしかな位、かやうな譯から遂ひ今まで評論を加へずにしてしまつた。

扱右の二首は「鎌倉懷古の巻」中の「道」の歌であるが、前のは「宗教の道」後のは「道路の道」な事は歌の意味と共に明瞭である。叙情の歌の戀の歌の、濃厚しつこいのに見わきた時には、這那罪もないサラ〜としたものを見るのも一興かと思つて、茲へ引き出して來た。

夕暮の戸に立つ乙女道とへば面をむけて右と答へぬ（鷹野止水作）

近江路に繪日傘させる娘見さ「左京道」聲のちひさき（長澤蓼水作）

夕ぐれの戸に立つ乙女は、深い／＼物思に沈んで居たのであらう。戀に破れ情にはなれて、今は物言ふさへも抄々しからぬ程に思ひやつれた不憫の者。近江路に繪日傘さした君、いかに愛くるしくあつたであらうか「左京みち」と云つて面羞げにやや根めし其頬、低く小かつた其聲、それも／＼長へに得忘れぬものであらう。技術も情も後のがまさつて居る、「娘見さ」とのみにて「問ふ」なる詞を用ひないで、しかも前後の事情を現し盡した處、「答ふ」と云ふ説明を省いて「聲の小き」の形容で以つて、妙齡の少女を躍動させて居る處、新派歌人苦心の程を見るに足る。

歌に右、左、とかを斷はるのは俳句から來たらしい。句ははつきり覺えて居ぬが何でも「戸口出で、左へ曲る燕哉」と云ふ様のであつたが、あせ左として右にしちゐのか、なせ右とか左とか斷はる必要があるのか、など、質問のあつたに、子規子は答へて「右」も「左」もどちらでも其時の句の調子想の具合できめてよろしい、ワザと斷はるの

は印象を明瞭にする利益がある、と云はれた様であつた。和歌に「右」「左」を用ひ、

「東西南北」を用ひるのもつまり子規子の説と同じ用意と必要とからなのである。

村はづれ緋桃花さく板橋の橋の袂を右へ別れぬ（鳳晶子作）

其花の小さき花にゑにしあり野をやく炎道右に行け（水野蝶郎作）

心柄か音調の具合か、右と云へば優しく左と云へば雄々しく、右は女性で左は男性である様に思はれてならぬ。で前の歌なども「緋桃花さく」板橋のあたり、別れたのは無論若い男と女で、戀中とまでは行くまいが、しかし艶になまめいた別れである。之を「左へ別れぬ」と云つたら、音調上はとも角、一首の調和の上から甚だ面白からぬのである。蝶郎子の歌でも同じ事、野火に今やけんとする小さき花に何となく或因縁がある様に思はれて、無残／＼黒焦しにするのが可愛想である故、野火の炎よ左其花の方へは燃え廣がらで、右へよけてはくれぬかど。頗る弱い心の歌であるから「左行け」と云つては不調和を來たすのである。

左手に血に染むかうべ七つさげて酒のみをれば君召すといふ（與謝野鐵幹作）



打物取つては鬼をも挫く荒武者が、今日の一合戦に敵味方の眼を驚かして切取つたる七つの首級、悠々と左手に提げて我陣屋へ歸り來は來たけれど、急いで君前に罷出でて恩賞に預らうなど、の功名心もなく、大甕の酒に大柄杓立て、立ち續けに二三杯あふり居る處へ、誰れ人かの注進によつて君公の耳にも其勇名が聞えたと見え、破格の御目見えでも許されやうと云ふので、今お召しの使が其口上を傳へ居ると云ふ場合の歌で。此初五、右手としては全く勢が失せて了つて一首の調子がぐらついて了ふのである。

君が問ふ薬師の家はかの角を左にをれて桃さける處（落合直文作）

此左はあまり此歌に付いて重味を有して居るのではない、つまりは右でも左でも構はない様なものの、薬師のもとへ行く人であるからは、只孱弱いあはれな人と云ふよりも、どこかに一種の怖を抱いた風姿から押しても矢張左がよく調和して居る。

橋を右へ小百合はちすの一車嵯峨の童の朝日涼しき（有地紫芳作）

之も全く音調上の關係から「右へ」としたのであらうけれど、出來上つた後から見れば

やはり「右」が相當である。歌も清新でいくらか綺麗の趣が添はつて、「朝日涼しき」など新しい好い詞だ。

しのび足に君を追ひ行く薄月夜右の袂の文がら重き（鳳晶子作）

例に因つて艶麗である、繊細である。髪のはつれも見えるであらう、頬は朱の色に、裾もあらはのしのび足の、戀には殆んど狂はん計りに吾を忘れて君を追ひ行く乙女を描き乍ら、一轉して「右の袂の文売重き」と、まことに細い感想を謠つた。之れが女性の女性たる所以をあらはした標本であらう。「左」「右」と斷つてはない中に。

おばしまの其片袖ぞ重かりし鞍馬を西へ流にし霞（鳳晶子作）

おとも其通りなので、

おはしまにかけた片袖は女性だけに細かな動作に氣がついて居て、欄頭の人の猶他の一人まで目に見えるやう。「おもかりし」の一句に、別れ難い立ち憂い感情なり態度なりを云ひ現はしたのは巧だと思ふ。

と鐵幹子も云つて居る。

さはいへど君が昨日の戀がたり左枕の切なき夜半よ（鳳晶子作）

星影に胸をさらしし其夜より左の乳房痛くおぼえし（大槻月啼作）

何れも歌に厭味はあるが、只譯もなく理窟もなく「左枕のせつなき夜半よ」とか、「左の乳房痛くおぼえし」とか云つてゐる處に、古人が未だ歌の領分に入れなかつた或迷信のやうな、一種の感想が描かれてゐる。此邊から見ると亦「左」と云ふのが何だか災厄、禁厭等に調和する様にも思はれる。

鳳女史の歌を解釋して見やうならば、君が細々と話になつた昨日の戀語りは妾には何の關係もない事である、さは云へ熟々想ひ見れば丸で妾に關係のない處か、それ程君を惱まし悶えしめたのも原因はと云へば全く妾から出た事。人前もある故其時は知らずと云つて通したものの、扱て我今宵の夢のなり難さ、誠に寐ぐるしい事である、と云ふ様なのであらう。

試に枕にしきし折鶴の見えぬ此日よ今年われ厄（窪田通治作）

さりけなく御籤さくりては、笑みてさても春日の今日暮れ遅き（柄澤いかつち作）

「今年われ厄」とか「御籤さくりて」とかは、神、幻影など、同じに新詩社の特長である。後の歌に關する鐵幹子の評がおもしろい。

春晝の無聊を叙したまで、「春思」など云つて春の懊惱を歌ふ程の煩悶があるでなう。「さりげなく」と云ふ句に重きを置いて見るのであらう。何のあてもなく無聊の餘りに御籤を探つて、心にもない御籤が出るので破顔してゐるのである。

御籤の事を云へば茲に人傳に聞いた事の話がある。

田舎に居る甲某があつた、此人が昨年正月東京の友人乙某の許から來た書信のはしに。

母やむかあらぬか鳥しばなくに御籤をひけば凶の二十一

と云ふ歌の書い付けてあるのを見て、痛く面白がつて居ると、其六月に明星の第三號が出て、其中に

御籤引けば二十一吉とあらはれぬ神も知らじな我おもふ人（與謝野鐵幹作）

と云ふがつて居る。固より乙某と鐵幹子との間に交際のある仲ぢやあし、よし交

際があつたにしろ鐵幹子がまねる筈はない。もし暗合とすれば吉と凶との相違はあるものゝ、「二十一」の御籤番號の合つてるのが面白い。で其友人によく問糺して見ると、乙某からの返事のは「小生のあの歌は本年(三十三年)一月築土八幡境内に於て遭遇したる實感である、冬の日の曇つた空に雲の往來の只ならぬ時、寒いから風は容赦もなく遊子の破れた袖に吹いて、さびしいうら悲しい感じは一時に胸に押し迫つた、其夕暮の鳥は時を求むるのでもあつたらう、聲噪がしく梢の上を鳴き迷うて居るのが、又一しほの寂寥と感懐とを促すので、はしなく家郷の事など想ひやりて口吟んだのは即ち其歌である。」云々と書いてあつた。相談したのでも模倣したのでもなく、またありふれた想とは違つて一年前の和歌壇には、未だ殆ど見出し得ない程の「御籤をひく」と云ふ事なのである。其着想の相暗合したはまだしも、「二十一」の文字が暗合してると云ふんだから、餘程奇である。しかし歌丈を云つたら、鐵幹子のは複雑の想を甘く云ひこなした手柄で勝とせねばならぬ。歌の大意は、我思ふ人は我を思ふ人ではなく、我思ふ心はいかに強くとも、此戀の末どぐる事は到底

底期し難い所。それに御籤のおもてでは「二十一吉」とあらはれて行末望あるものゝ様に判せられるが、之は神様も我思ふ人の誰であるかはまこと御承知ないと見える、もしさもなくば「吉」など云ふ御籤のでやう筈がないのである。云々

古くは

我せこが來べき宵なりさゝかにの蜘蛛の振舞かねてしるしも (古歌)

などゝ、やはり或兆候を歌に入れては居たが。今日の様に精細なる歌ひ方をしたのは極めて近い話である事は略のべた通り、俳句にも

初曆五月の中に死ぬ日あり (子規)

初曆妻娶る日も見當らず (作者未詳)

こんなのがある。子規子は「五月」はいつでも病が募つて苦しむ月であると話して居られた。

斯様赤想は寫實派や叙景派や佐々木氏の觀念派の中には生れて來ないので、叙情にも戀にはあまり此御幣擔を謠つて居らぬ。「まぼろし」派など、あだな謔名されつゝある明星誌

上の、抽象派(假にかく呼ばう)には流石ポツ／＼見える、殊に窪田通治子には  
 何となく心はうれし占はよしまさん君を誰と定めん  
 蓋とるも宮の御籤よあらざらん夢に見ざりし此あけの朝  
 初曆からんはさあれ心うのことし惠方を何れと定めん  
 立ちつゝく松のけはひの神さびによしのありげに行くを憚る、  
 などがある。

人氣なき夕や軒の蜘蛛の子にのるひの一手問はんと思ひき(篁碎雨作)

呪歌かき重ねたる反古とりて黒きこてふを押へぬる哉(鳳晶子作)

呪咀の事を歌にしたる人は此外に二三人ある丈だ。

法皇の御腦平愈の朝ぼらけ院の飼馬とみに斃れぬ(服部躬治作)

裡面に呪咀の事でも含めてあるらしい。歌はあまり散文的で感服が出来ない。

鳳女史の呪歌解らぬ人はあるまいけれど序ながら解釋しておかう。元來此歌の體は重  
 に二ヶの概念の餘情と餘情との調和に趣を保たせる仕組で、俳句には慣用の句法であ

る。

春風や堤長うして家遠し(蕪村)

「堤長うして家遠し」と云ふ一概念の餘情と、「春風」と云ふ一概念の餘情と合ふ處、長  
 閑さと云はうか意味と云はうか、兎に角言外の趣味が含まれて、春風洋々芳草離々  
 の長堤の光景が躍つて居る。

税輕き十戸の村や桃の花(鳴雪)

十戸の村にある花は固より桃の花には限らぬであらうが、梨の花でも櫻花でも乃至菊  
 の花でもいけぬ。茲はやはり「桃の花」が動かぬ所であると云ふのは、太平の民と野  
 趣ある桃の花との調和上離す可らざる關係があるからで、之を假に美的關係とでも云  
 つてれかう。

此美的關係が今の呪歌の歌にもあるので、即ち「呪歌書き重ねたる反古」と云ふ概念の  
 餘情と、「黒きこてふ」と云ふ概念の餘情と相合ふ處、何處か怨の多い、むしろ毒々し  
 い程の強い恨みの情があつて、此二概念の間に離る可らざる美的關係がある。此關係

を會得すれば此歌の意味も亦了解せられるであらう。早い譬が、此胡蝶を「白き胡蝶」  
として見たら如何那に不調和を來たすであらうか。白は高潔の色飾のない色悟りの色  
である、呪歌と云ふものは怨みの歌、妬の歌、執着の歌であるで、丸で相反したもの  
なので、此相反した意味の二概念が因つたとして其處に統一の出來やう筈のないのは、  
又多く言ふを要せぬ。

本論が啓蒙の爲である事は別に斷はつて置いた通りではあるが、殊に斯様事は知れき  
つてゐる事であるのに、長々しい談義さを煩はしいとの評もあらうけれど、之れとて  
本書の目的から云へば大目に見て貰ひたい。

で新派の和歌の中の一審分り易いのは、子規子一派、服部氏、金子氏、などの作で、  
佐々木氏のは一の理窟が這入つて居るものゝ、誰にも分る理窟で之れ亦難解の歌は  
少ない。落合氏や月の桂のやなども同じく平易な方である、そこへ入つては世人から  
攻撃を受くる程に六ヶしい評判の通つてゐるのは鳳女史の作である。作者の肩をもつた  
ら、作者の頭脳が進みすぎて、一般以上かけはなれて進みすぎた趣味をもつて居る故

だと云はう。又見る人の側からは、譯の分らぬ誤摩化し歌や自分よがりの灰殻歌は見  
せらゝるが迷惑ぢやと云ひ得るであらう。斯様に作者と讀者との間に間隔がある以上  
は、或程度迄は兩者を接近せしむる必要がないでもない。我輩は敢て何を識れりと云  
ふではないが、之も趣味普及と云ふ上からの仕事と思へば、茲らで其難解の歌を少し  
解釋する責任がないでもあるまい。

右様な理由から茲にしばらく「みだれ髪」の評釋に筆を染める必要が起つて來た。

夜の帳にさゝめき盡さし星の今を下界の人の鬢のはつれよ（みだれ髪）

「夜の帳」は、單に夜の室と云ふが如きもので、帳と云ふからいくらか尊い上品な意も  
含めてある、「さゝめき盡さし星の今を」とは、帳中の夜ふけて私語さへも盡きた、星  
の契りの平和に圓滿なる時をどの意、かく天上の戀はまことに圓滿であるが下界を  
瞰下せば、あはれ人の世の脆いばかりの戀の運命に、もだえの姿はなやましう、鬢の  
はつれのしるくも認めらるゝとの光景を「下界の人の鬢のはつれよ」と云つたので、  
要之天上の戀は圓滿なり、下界の戀は煩悶なりと謠うた、餘程雄大の構想であつて、

「みだれ髪」巻頭の歌としては恥かしからぬ作である。

歌にさけな誰れ野の花に紅き否む趣ある哉春罪もつ子（みだれ髪）  
之を詩人に問ひ玉へ、誰か野の花の紅なるを厭ふものかある。戀は荒める我世に咲ける「紅の花」である、誰此美しい戀を惡むと云ひ得るものぞ。我は春罪もつ子——つまり戀の子であるからは趣ある此戀を愛せずには居られぬ。と云ふ大意で、「罪と云ふ一語を戀の悶に代へた修辭が殊に奇警だ」と鐵幹子は評して居る。

髪五尺ときなば水にやはらかき乙女心は秘めて放たじ（みだれ髪）

上の句と下の句との間に「されども」の意を含めて見るべきもの。五尺もある黒髪を水にとけば和くなつて了ひはすれど、乙女が胸に藏むる一片の赤心は容易に打ちあけまいと。正面から云へばそれ丈であるが、「髪五尺」を「水にとく」と云ふ事は何れも隱喩で、女が男の情に感じて或程度までは心もゆるすけれど、の意が含めてあるものと見たがよいだらう。多少打ちとける處があつても、乙女心の一筋に守る操は中々容易くは男に許しはせぬと、意張つた處が一種の霸氣(?)を帯びてゐて面白い。

血どもゆるかさん一夜の夢の宿春を行く人神おとしめな、（みだれ髪）  
六ヶ敷歌である。

「血ずもゆる」は懊惱に堪へぬ事。「かさん一夜の夢の宿」は、單に誰にもあれ一夜の宿は貸してやらうと云ふ事。「春を行く人」は春の人、「神おとしめな」は神を卑下するなと云ふ意である。さてかうしても矢張明了に解釋が出来ぬ。しひて云は、此身も懊惱に堪へぬからとにかく一夜の宿はかしてやらうが、春の人よ——懊惱の子よ——神を輕蔑して汚れた事をしてはならぬぞ、我世の神は神聖なる戀の外は許さぬものと定めてある。然るに其掟を破つて汚を我に迫つてはならぬよ、それが承知なら一夜の宿はかしてやらう……位の處である。

椿それも梅もさかりき白かりき我罪問はぬ色桃に見る（みだれ髪）

句法の奇警、奔放先づ見る人を驚かすに足る。歌の意は、椿も梅も白いから罪ある此身に氣がおけてならぬ、惟り紅の色に咲いて居る桃丈は我罪を問はぬ色であると思え親み易くなづつこい様の氣持もすると云ふので、罪と云ふのは無論戀の罪である。戀す

る身には白い梅や白い椿はあまり高潔で悟りめかして居てうしろめたい、只桃の花の和かなのは能く自らの身を友にしてゐる事が出来る、云つたのである。かやうに色を種々に使ふのは新派の特調であつて、しかも女史の得長と見るべきものだ。

乳房おさへ神祕の扉こまうとけりぬこゝなる花の紅こまが濃さ（みたれ髪）

初五は只形容であらう、神祕のとばりはいかか大詩人でも大哲學者でも乃至大宗教家でも、明に裏けて其中の奇妙を窺うた事のないので、とても解らぬなら解らぬにしてしまへばよいではないか、そんな空想に耽つて居るよりは、此紅の濃さを味つた方がよいと云ふ。紅は戀なる事今更云ふまでもない。

かくて尙あくがれますか眞善美我手の花は紅よ君（みたれ髪）

之れは殆ど前者を解しての後、解を要せぬ程であらう。眞や善や美や畢竟我戀にまさる幾何ぞ、君それにあくがるゝを止めて須く戀愛宗に歸服し玉へ……随分思切つた想であるのみならず、用語が頗る突飛である。

「神祕」「趣ある」「眞」「善」「美」等の抽象的文字が、和歌に適するか否やは頗る疑問

であらうけれど、然定論者と否定論者と共に科學的數學的の推論をなし得るのでなく、究竟趣味の問題となり、程度論となつてしまふのである。とても草創の時、混亂の時代であるからは、思ひいに創意を出し發明を心掛けた方が、斯道の爲でもあり、和歌から新體詩に移る一階段としての研究に必要でもあると信ずる。

色を使ふ事に付いてもいろゝ注文がないではない、しかし之れとどの色はどれ、此色は何、と其比喻の本體まで極めると云ふ様な、うんな狭い意見は却つて藝術の進歩を阻害する様になる故、いつそ縦横に作者の爲す所に任せて置いたら、終には一致の標準も成り立つて來やうと思はるゝ。

以下「亂れ髪」の評釋を爲すと同時に「色」に關する論評を併せて見やう。

君かよる朱の欄小夜更けて雪洞ほんどうの火に櫻はなちるなり（正岡子規作）

うなる子も茜あざのたすき打ちかけておのが手函てがふのすゝ掃はらひする（丸岡月の桂のや作）

紫むらさの文ふみ宮みやの紐ひものかたゝを我のとかへて結むすひやはいかに（落合直文作）

之等は固より色其ものを具象的に云つたので、歌の意は別に解釋する事もいるやう。

紅のさては緑の黄栌葉の遂に眞白の我あり世あり（篁碎雨作）  
之に關しては鐵幹子の評言を引いた方が、よからう。

或主觀を具象的に現はさうと云ふ傾向の中で、之は近頃最も新らしい作風の一つ。色彩を假つて來て自己の運命を叙したのが此歌。紅は派手に艶な色、緑は深遠で濃重な色、こゝまでは希望もあり活氣もあり榮華も有つたやうだけれど、黄栌葉から終に眞白に至つては心細い、さびしい、光も無い我一生の運命であると云ふので、我國では例の無い詩體である。云々

「眞白」を只「さびしい」と云はれたは少し物足らぬ。青春の時代——紅、功名の時代——緑。沈重の時代——黄、悟入の時代——白と云ふ様な分ち方であらう。前にも書いた通り白は悟りの色である。戀も榮華もさめては只一場の夢、萬法終には一に歸する我なり世なり、と云ふ意が含まれてゐるのぢやなからうか。

此歌第二句目「さて」は疵で、之ある爲全體を輕佻ならしめてしまつた、想ふに作者が止を得ず挿んだ「さては」であるだらう。

もえてくかすれてきえて闇に入る其夕映に似たらずや君（山川とみ子作）

作風の新奇比喩の巧妙は前者に劣るであらうが、句法の洗鍊、調子の高く沈着いて居る事は數等の上であつて、山川女史作中有數のものであらう。作者の本意は戀の生涯を描いた積であると察しらるゝが、強ちにさうばかり見なくとも、廣く一代の秀才が時勢の潮流に押されて、花々しき名譽の壇上に立つたも一時、才を負うて才に失はれ、次第く零落しては陋巷に膝を抱く程となり、遂に自暴自棄して世をも人をも怨み詫びつゝ其一生を了つたと云ふ、前者の悟めかしたとは異なり、どこまでも人間を放れなかつた處が殊に嬉しいのである。元來古來の和歌はどかく厭に悟りすました事を云つて居るには、殆ど讀む我々が困却する。殊に當世新派歌人などは多く青春燃ゆるが如き人々であるから、心にもあらで悟りぬいた事を云はれたならそれこそ、厭味でく堪らなくなる。今の艶麗體を脂粉の氣が多いの何のと排斥する人があるが、今云ふ通り艶麗體を放れた新派和歌は如何なるであらうかと云ふ事に一考を煩はして貰ひたい。何れの場合にも不正直は大禁物である。



燕脂色に人は袂を染めなれてまたしと云ひぬ我こむらさき（與謝野鐵幹作）  
燕脂色と濃紫とを、人と我との戀愛の熱度に比較したもの。燕脂色の強い度で我を戀うて居るに、我は其人を戀ふるに漸く濃紫の度でさへないのを、其人は怨んで「まだし」と云つた、君の戀はまだ薄いと云つて怨んだ——と云ふ意。色を云ふから「染め」「袂」など様のものを籍りて來たのである。

紺青を絹に我なく春のくれ山吹かさね友歌ねびぬ（鳳晶子作）

此歌亦色の比較を以つて戀愛の比較に擬してある。紺青は色の中でも最も強度の光彩を藏して居る色、之を失戀の色執着の色にあて、山吹色の罪少ないあどけない色を羨んだので、此懊惱の春のくれに我は失戀の爲執着の爲にないて居るに反し、友は其美しい平和の戀に、楽しい夢を見てゐる故其歌さへもねびて居る。と全首隱喻を用ひたから、「絹」「山吹がさね」などの語も從つて挿まねばならぬ様にあつたのである。此歌は鐵幹子のに比して厭味がなく句法も落付いて居て、比喻も餘程の巧を盡して居る。

紫のあけの菡萏の水色の絲はさまく花はましろき（與謝野鐵幹作）

紫や朱や菡萏や水色や、詩人の謠ふ處千種百種あるけれど、謠ふ處の終りの一點は花にあり眞白き花にありと云ふ、「絲」は詩、「花」は戀に比したので、戀愛を紅に比したとは全く反對の白であるが、茲のは白の單一なる色なる事を云ひたる迄の事であらう。

其色を花にもとめて絲に得ん天のゑにしの臙膩紫（増田まさ子作）

「花」は戀に、「絲」は詩に。

造化の授けた——天のゑにし——美しい人の情——臙膩紫——は戀に求めて戀に得ずして却りて詩に得る事が出来るであらうとでも解すべきか明星十五號に於て、鐵幹子が此歌の解釋をして置かれたが、之にも賛成は出来ぬ。何れ明瞭の歌では無い。

増田女史近來の進境大に見るべきものあり、明星派中嶄然頭角をあらはして來た。未だ調子が輕佻で謠ふ處浮薄の誹はあるが、其伎倆は右の歌に因つても見る事が出来る。

とき髪に室むつましの百合のかをり消えを危む夜の淡紅色よ(鳳晶子作)

「とき髪」によりて我其打ち解けたる様を見、「室むつましの」で二人なる事を知る。「消えを危む夜の淡紅色よ」の意は。淡紅色がふと夜の闇に消え行くではないかと、只譯もなう危んだ意なる事も知るを得たが、「百合のかをり」の妙用は遂に會得し得なかつた。固より室の活花が百合で其かをりは只其場合の添景にすぎぬだらうとは思はない。方に此時美妙の樂の音雲の外に起り、一陣の和風はいづくともなく百合の香をもたらし來つて、其爲に淡紅色の衣の人が天上でもするのであるまいか、それが不圖見るに消え行く様に思はれたとの意を含めたのであらうと推せらるゝが、所詮合點の行きかぬる歌で多少病的の歌なるとは免れない。そして此歌をどは分らぬ歌の第一流であらう。

紫にもみうら句ふみたれ篋をかくしわづらふ宵の神(鳳晶子作)

「紫にもみうら句ふ」と云へば帛紗であらう、みたれ箱は化粧道具を入るゝ箱。帛紗に包んだか、又篋其物の表が「紫」で裏に「もみうら」が句うて居るのか、それは何

れにしても兎に角く艶に美しい「亂箱」を春の宵の神がかくしわづらひ玉ふと云ふので、例の如く隱喩の歌である。春の神は戀愛の神、篋にひめたるものは戀の命。孱弱い脆いしかも美しい戀の命、浮世のあらしにあってんは惜しと、かくしわづらひ玉ふ神の御心のさても忝なさ。巧妙なる技巧はいつも乍ら只感服に堪へぬのである。此歌艶麗にして浮華ならず、着想清新にして神いちりに走らない事は、先の「紺青」の歌と好一對と云ふべしだ。

臙。臙。色は誰にかたらん血のゆらぎ春のれもひのさかりの命(亂れ髪)

春懊惱に堪へぬ子の心は正に臙臙色の如く、燃え立つて血はゆらぎ胸は迫りて、殆んど命も絶えなん計りなるが、誰れか此切なる情を汲んでくれるものぞ、と頗る多感の歌である。しかしどちらかと云へば厭味の歌で、女史の作としては長所の短所があらはれてゐる。

紫の濃き虹説きし杯に映る春の子眉毛かばそさ(亂れ髪)

海棠にえうなくときし紅すてゝ夕雨見やる瞳よたゆき(同)

清水へ祇園をよぎる櫻月夜よひ逢ふ人みな美しき(同)  
之等は、例の美的關係の調和によりて成立つてゐる歌で、只濃艶の極を盡した歌と見るまで。

まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はらから牡丹に名なき(みたれ髪)

「女はらから」が牡丹を培養して、來る人を待ち酒を勧め歌を強ふるなど、は先づ現實に縁の遠いとだが、假りにさう云ふ人があるとして見れば此歌の大意も分る。「牡丹に名なき」は牡丹の名も姉妹の名もまだあらはれてないと云ふ事。一國の上流にある貴いれ方に酒を勧め乍ら、此處の牡丹と共に妾共の聞えも多少あらはれます様、歌で天下へ御紹介を願ひたいとそれとなくせかむ處、一字一句も忽にせず全首絢爛、艶麗の妙をつくしてあつて、前數首にまさる事亦一等である。

水にねし嵯峨の大堰の一夜神紹蚊張の裾の歌ひめ玉へ(みたれ髪)

「水にねし」は強ち舟中に宿つたと云ふではなく、單に水邊に宿つたと云ふ位。嵯峨の大堰のひと夜神」の嵯峨の大堰は上の「水にねし」と下の「ひと夜神」とに兩用さるゝも

の、蓋大井川は古來歌枕の名所にして、「大井川行幸」以來の舊跡である。「紹蚊張の裾云々」は其歌を秘めて人に示し玉ふなど云ふたにすぎない。で全首の意を推せば、作者夏の一夜を大井河畔に明した時、藝術の子をわはれと覺し玉ひてか嵯峨の大堰の神の御姿を現して、互に和歌の贈答でもしたのであらう。其時の歌は随分恥かしいものもあり、他し人に見せては面はゆい事も云つて置いたから、何卒秘めて置きたいものと云ふ様なので、随分と難解のもの、一つである。又朦朧で神いちりのすぎたと云はれるもの、一つでもある。「水にねし」「一夜神」など何れも作者の造語らしい。

春の國戀の御國の朝ほらけしるきは髪か梅花のあぶら(みたれ髪)

戀を排するもの、艶麗を厭ふ人、歌を社會的に論ずる人には敢て勧めはせぬが、苟くも藝術を知り歌を知り戀を知るの人は、脂粉の氣多からば其多きがままに、女史の長所と短所とを見分けて、今此に引いた濃艶の歌を再三誦吟するを否み玉はぬであらう。「春の國戀の御國の朝ほらけ」と云ひ下したる句柄の大なる事用語の奇警なる事、更に「しるきは髪か梅花のあぶら」と一轉して、春も戀も乙女の髪に匂ふ梅花のあぶらに隼

ると云ひ了つて、迂餘曲折の所奔放の勢をもてるが中に、一種優婉の氣にみちたる、實に目ざましい詠み振である。

若き子が髪のしづくの草に凝りて蝶と生れしこ、春の國（みたれ髪）

天の川そひねの床のとはりこしに星の別れをすかし見る哉（同）

其子二十櫛にちかるゝ黒髪のれこりの春の美しき哉（同）

何れも皆第一流に列せらるべきもの。

牧場いで、南にはしる水長しさても緑の野にふさふ君（みたれ髪）

女史の歌は多くは戀なり、神あり、女性なり、貴族的なり、堂上のなりで、そして又煩悶で懊惱で、失望で怨恨であるから、此様に田園の趣致を謠つたのが珍らしいのみならず。斯様に圓滿の想もあまり多くない。

圓滿の着想は元來女史の得意なものであつたので、圓滿のものが少ないと云つたら或は一面の矛盾があるやうである。然り辭が足らなかつた、さらば近來圓滿のものが少ないと云はう。一々立證して云ふ程の事でもないから夫は略くとして、圓滿で優婉で

あるべき人が才に走りすぎて、技巧に陥つたのを危ぶんで居た我々の眼には、此牧場の歌が殊に嬉しく感ぜられた。調子のしまつた、しかも丈のびやかな歌振りが、緑の牧場に羊と共に雲の色にでも見とれて居る田園詩人の様と誠に離る可らざる調和を保つて居て、殆ど贅辭に窮する程である。

神こゝに力を詫びぬとき紅の句興がるめしひの少女（みたれ髪）

「とき紅の句興がるめしひの少女」にどうか一目此紅の色のけはくしさを見せたいと思召しても、茲に至つては神も其力の及ばざるを嘆じ玉うたと云ふ歌の意で、之れは矢張紅は戀に譬へられて居る。單に戀のみでなく藝術の趣味を感得する上などにもあてはめて差支はない。趣味の會得も或程度を超えてからは他よりの説明でとても出来るものではなく、必ず自ら求め自知らなければならぬとて、ろこに至つては神の力と雖も施すに由ない事である云々。

着想の嶄新も手柄だが、其複雑の想を僅少の文字に云ひ負せたのが最も手柄である。「みたれ髪」のみに付ての註釋はしばし廢めにして、尙「色」の用ひ方に付いて少しの説

明を加へて見やう。蓋「みたれ髪」の歌と云つても大約の解釋法を悟れば一も二も譯らぬ歌のみではなく、うして以上説き來つた所で大抵解釋方法も了解し得るであらうから。

「紅」の次に多く用ひらるゝのは「紫」で

我心ろろ砕けて流れいで、薄紫や春の野の水（水野蝶郎作）

抽象派に屬する作品の一ツ。鐵幹子曰

春の水を詩化したので、このやうな種類のもは我國に例が無い。温かな、うら若いゆるやかな春の水と、恍惚として野にある我的心とが同化したやうの心地。

うす紫と云ふ所よ春の思が能く現はれ居るし、そゝろ砕けて流れいでと云ふ諧調に富んで居る修辭に、恍惚たる同化の感情が甘く盡されて居る（下略）

尙

ゆるぎ行くみのもの影の濃紫緑さすよと見れば消えたり（篁碎雨作）

亦「まばろし」である。

忘れ難きとのみに趣味を認めませとかし紫其秋の花（鳳晶子作）

句法と用語丈である。

野の夕花つむ我に歌しひてただ「紫」と御名つけましぬ（與謝野鐵幹作）

「紫」の神はやはり戀の神でおはすだらう

ほそきくさは云へ強き御聲なり董さく野に答へます神（水野蝶郎作）

理想は消ゆと叫んだ古賢の耳には、此細きくさは云へ強き董の神の御聲が入らなかつたのだ。

紫の其濃き色を君知るか戀を得し子のさだめの色よ（前原章舟作）

さても濃き紫好む君なるになど其歌よろれにふさはぬ。（宮澤杏村作）

一は純然たる戀の紫、他は稍戀を含めし紫。

花や雨や野の紫や春の日記酔ふ子しばしの夢まどろまむ（増田まさ子作）

春を紫に擬へた歌で、暮春の感懷をのべたもの。花さく花ちる雨がふる、野は霞に山は紫の春の日記はまこと花々しかつたが、今や漸く春もくれて其美しかつた眩ゆかつ

た光榮に酔うた子の酔もさめたから、しばし茲で眠を貪つて遊びの疲をなぐさめやう、と云ふ主觀を巧に云ひ現はしたものの、

世の中にたえて櫻のなかりせは春の心はのどけからまし

の趣意を換骨して來た作。業平の歌の誇張に過ぎて其實に乏しいのとは違つて、春櫻の境を去りて青葉若葉の清新を求めやうとする折の、過渡の感興を云ひつくして又餘蘊なしである。業平は大なる感想を迸して只一の櫻花にそゝいだ爲失敗の作となり。増田女史は其大なる感興を花や雨や野の紫やに灑いだ爲に、誇張浮華の妄評を免れた。形と想との一致また六ヶしい事ではあるまいか。

茲に少しく「日記」の歌を擧げて見やう。

花くもり又花くもり花くもりと花どきの日記つねに似ぬかな（金子薫園作）

移りこし磯邊の宿に朝な夕な雲をうつして雲の日記と云ふ（窪田通治作）

「花くもり」の日記は俳句などに古くからある、「雲」の日記は西洋趣味の輸入されて以來の事、併し之を以つて贅辭を呈したら、作者の窪田氏はむしろ迷惑かも知れぬ、

子等つれて岡崎去ると日記にありわれよりの春七つの童（與謝野鐵幹作）

之は自分の父親の日記であらう。若い折りの日記見ると懷舊の情が胸を若やがせるものであるとは老人の能く云ふ所。まして父の遺筆に記るされたる我往時の記録を見出でたる折の感じは逆も三十一文字の得盡し得るものではあるまい、されば此歌も只正面より平叙したにすぎあかつた。しかし想が新しく複雑であるから多少の趣味は無論掬するにたへる。

さは聞けどその惱のあれかしを先づかく今年あたらしの日記（窪田通治作）

惱の辛らきは人も言ひ我も知る所、しかも其惱の中にうれしき事もあり涙の中の微笑は又中々に忘れ難き味もある。新らしき年の始めに立ちて一年の望は只それ惱のみ、嬉しい美しい惱のみ。作者常に人生の意義を謠うて幽玄、溫靜。此歌など又其類である。

誰が爲と殘し置きけん我爲はつらさばかりの日記の戀歌（服部躬治作）

「遺物こそ今は仇なれ」我には辛き日記の歌、さりとて焼きすてもせぬは究竟弱き心か

らである。着想は面白いが「戀歌」の「戀」の字贅である。

旅の身の大河ひとつまとはんや徐に日記の里の名けしぬ（鳳晶子作）  
旅人の日記。

惆悵去るに忍びぬ大川の水、さはれなまじの戀は我決して乙女に願はない、雲を笠草を袂の旅の身に戀もなさけも要のない事。後の思出のよすがとならんも心うしとて、徐かに其里の名を日記から除いた旅人の心構ころ、むしろ面悪くい程である。

偶然服部氏のと相反した言方をして居るのが、相照應して何れも一しほの趣を添へる。明日はたれ嬉しの日記の筆とらん我にはつらき思出の家（窪田通治作）  
之れ亦旅人の歌。

一夜の宿屋に覺えし戀のうれしみは、其家を去ると共に辛き思出の家となる。我が去つた明日の日は、誰れか此處に宿りて「嬉しの日記の筆」とるであらうと、いつて妬ましい程にも思つたのである。

灯を立て、筆とる日記の妬まじや旅の若人明日は何處へ（篁碎雨作）

之客觀より日記を誦ひたるもの。「妬まじや」には深い意味はない。若き旅人が燈をかきたて、更くる夜の知らず良に、筆走らすも輕う日記書く姿を心にくく思つた丈のである。情が優しうて調子がしつとりとして居て作者の性格までが眼に見えるやう。

おのつから繰る手おのく旅の日記朱のしるしに面をむけぬ（長谷川濤涯作）  
之も戀の名残りの罪を知る子の聲である。

其日のみしるさで止みし我日記よ枝折の花に只任せつる（河田芳水作）

枝折の花と其戀の命とは何れか早く盡るであらう。

京の宿に残れる我名なつかしきなどそれもちて消えていなざりし（山川とみ子作）  
日記の歌ではないが、京の宿屋の宿帳にしるして置いた頃は處女の名であつた。今は人の妻となり姓も異つて居る、なせあの名のまゝに消えてしまはなかつたであらうと。結婚を排した一部論者からは危険の思想など、攻撃せらるゝ方の歌である。「それ」「其」等の代名詞の妙用を始めたのも新派の手柄で。「などもちて」は巧な詞である。

今日よりは泣かじ歌はじ笑はじとまづ筆とりぬ一月一日（中濱糸子作）

「日記」と断つてないけれど歌は「日記の歌」である。あまり巧みすぎてどこやら態とらしい所がある様にも思はれる。「一月一日」と云ふが珍らしい故引いたまでの事。再び色に關する評論に立ち戻らう。

露にさめて瞳もたくる野の色よ夢のたぐちの紫の虹（鳳晶子作）

修辭の巧も茲までにあればもう絶頂だ。人は多く難解の一つと數へて居るから例に依りて先づ解釋しやう。

はら／＼と散る露に假寐の夢はさめた。きら／＼しい紫の虹を眺めて渴仰の念胸にみちた一刹那の、其美しい夢は脆くも破れたが、まださめやらぬ瞳をもたげてうつとり野の色を眺せば、さても茲に亦美しい「夢のたぐちの紫の虹」が天の一方に繫つてゐるのであつた。「露よさめて」の五文字は野外の散歩か何かにしてしばし結んだ青葉陰の夢が、梢の露の散るによつて眼のさめたを意味し。「瞳もたくる」は、夢さめ際の眼の鈍く物見る事のはづらはしげなる様子。「夢のたぐち」と云ふは、今見た夢を直ぐ其儘にとの意。

夢と現在と一致すると云ふ事は決して稀有の話ではない。彼の人の訪ひ來し聲を夢と聞乍ら、其聲に遂に眼覺むれば友が破顔して枕頭に立つを見。又鶯の聲を夢に聞きつゝ其夢さめたに椽の柱に籠の愛鳥が、しきりに其矯喉をならして居るをぞ、我れ人共に折々實驗する所。其主觀を短歌に入れたのはまだしも、句法と用語の技巧は例乍ら感服と云ふより外はない。

うすき色は君にふさはは春にあはは濃き紫のそれめし玉へ（林のぶ子作）

熱情高き人のもとへやる歌としやう。之れも只或主觀即ち其人の性格を具象的に色を藉りて云ひ現はしたので。

紫の酒は我世にふさはは濃き紅の花を求めん（伊藤天籟作）

葡萄酒の美酒、夜光の杯よりも、紅の美しい戀を好むと云つた隱喩の例のもの。

許し給へわらずはこそこの今の我身ちす紫の酒美しき（鳳晶子作）

吾醉へり終に葡萄酒のさはれ人次のつぐ手の苦きも知りぬ（魚住拵花作）  
之等は葡萄酒の酒の歌。



ある甲斐もない身に、其美しい紫の酒しふる事は許し玉へとは先の歌の意で。  
吾は葡萄の酒の甘さに魅せられはからず酔を盡した。さはれ人次のつぐ手はよし玉へ、  
我は其味の甚だ苦さをさとつた。酒を戀に比して初戀の甘かつた事。其戀も迷ひ入  
つては甚苦しかつた事、もはや戀はしまいと覺悟した事を、具象的に云つたのは後の  
歌である。

「終に葡萄のさはれ人」句法新奇だ。

紫の黄雲にうつるしばらくは雲となづくか高きく思（與謝野鐵幹作）

「高きく思」は厭味な句であるが、全體の見付け處が奇抜だ。「紫の黄雲にうつるし  
ばらく」と云ふ上半に比して、下半の著しく劣つてるのは惜しむ。

紫の理想の雲のちきれく仰ぐ我空それはたきえぬ。（鳳晶子作）

雲を仰ぐ子は天上に其理想の影を求むるのであらう。今し西より流れ來たつた一片の  
紫雲。美妙の句をしたひて専念に打瞻視れるが中に、頼んだそれすら二つにちぎれ三  
つにさけ、はては千切れ百され跡方もなう消えうせた時は、如何に失望したであらう

か。

紫の襟に染め抜く白模様ねびにすぐれどさてよしはみぬ（窪田通治作）

紫の襟にひめすも思ひいで、君はほろまば死なんともよし（與謝野鐵幹作）

「紫」色に關する事は略右にとゞめ更に他を見んか。

ゆくりなく摘みしこの草香ひ高く花片白し何と名づけん（兒島青嵐作）

花の名は知らぬとか、名はいらぬとか云ふ事は、詩人的口吻でもあるのか。

何と云ふ名なりと君よ聞く勿れ此小き花あはれならずや（窪田通治作）

紅に名の知らぬ花さく野の小道急ぎ玉ふな小傘の一人（鳳晶子作）

などあり、「暮笛集」にも

名か思はずや逍遙に、

一本咲ける花を見て、

髪にかざして眺むるに、

名を問ふ隙も容れじとは、（尾が紅）

と謠つて居る。

若き子か乳の香まじる春雨に上羽を染めん。白き鳩われ。(鳳晶子作)

「乳の香まじる」とは濃厚の形容で鳩を擬人にしたのと共に厭味の歌である。尙此人の

ぬしえらばず胸にふれんの行く春の小琴とればせ眉やはさ君(琴のいらへて)

小川われ村のはづれの柳かげに消えぬ姿を泣く子朝見し。

等亦厭味になり技巧に陥つた、殊に

いはら云ふ「今朝も女の前よりきていやしき戀を我にもらしぬ」(落合直文作)

に至つては、吾人先輩を冒すの嫌はあるも、所謂新派なるものに望を絶たねばならぬかを思ふのである。

まみゆるに白きかさしよさては人の御胸の花を我はたつねん(玉野花子作)

逢ひ遇うて見れば君は白きかざしをかざし玉ふ。若き君、血を湛へます君、御胸も尙白きを装ひて戀しらずと宣ふべきか、我はそれをたづねして見やうと云ふ歌の意。「まみゆるに」「さては」の語共にはまりよく態とらしくない爲、全體が輕佻を免れた。

松陰のうすき月夜や磯の浪けふりに立たす神はの白き(清水橋村作)

叙景の歌として神の御姿も只ぼうとした丈のものと見た方がよい。

しろかねの雲のさべり見るがうちに紫金となりぬ西に低き山(一色白浪作)

亦好箇の叙景である。「西に低き山」で以つて眺の廣い形容に代へたは修辭上具象的

調子に落付を與へた。

かたち皆聲皆あらず思さえて流にそへる百合はの白き(水野蝶郎作)

秋の神のみけしより曳く白き虹物思ふ子が額にきえぬ(鳳晶子作)

白色と神、白色と神秘は相互に美的關係を保ちて居る故であらう、右にあげた様を作例が尙少くない。

身にしむよ叔父の翁のおくつきにささし葦の花は白かり(前田林外作)

ろや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあはれと泣く身(與謝野鐵幹作)

葦の白きを歌ひて二首何れも別境である。

白き駒しろがねの鞭それもなに情による子ねがひ少き(門地白雨作)

「白」もかく云ふ時は、白馬銀鞍——功名利達を意味する様にもなる。

白にはえ赤きに匂ふ遠里の櫻の色に繪書はまどふ（正岡子規作）

之まで「色」に關する評論を爲すにはあまり明星派の歌にのみ偏した様であるが、吾人も敢てしかせやうとは思つて居らぬ。只如何も他の人達、「迦具土」「片われ月」をはじめ、吾人が蒐めた零碎の材料の中では、色彩を謠つた作品が見當らぬには困つたので。よしや一つ二つを見出した處で明星派のやうに、色を喩に使つたり、或抽象の意味を含めたりしたものはあるまいと思ふ。右にあげた子規子の歌も、櫻花の色の白にはえ赤きに匂ふ、それを描くに繪匠の君が甚だまどふたと云ふ丈の意であつて、色彩を主にしたのではない。

黄金ぬり丹塗青ぬる御たまやの鳥居うづめて花さきにけり（正岡子規子作）

流石に子規子は景を叙する丈であるが、とにかく三色以上を一首に使つて居る。そして此派の人達の特得の調子は宛轉として、磐上珠をまろばすやう。

金色の翅ある童つゝと脚へ小舟こぎくる美しき川（鳳晶子作）

あまり作りすぎた想像で興味は少しも感せられない。

いづこまで君はかへると夕野に我袖ひきぬ翅ある童（鳳晶子作）

今は行かんさらばと云ひし夜の神の御裾さはりて我髪ぬれぬ（全上）

折々此様調子を見出すが、之れ等が病的和歌の見本であらう。

紅梅に金糸のぬひの菊づくし五枚かさねし襟なづかしき（鳳晶子作）

「みだれ髪」中「舞姫」の一節がある、收むる所二十餘首、何れも妍を極め麗を盡し、讀んでさへまぶしい程である。右は其中の一つで、紅梅地に金糸の縫の菊づくし、目さむる計りに華美な装は、恰かも女史の歌容其まゝである。

我いだくおもかげ君はうこに見ん春の夕の黄雲のちぎれ（鳳晶子作）

「春の夕の黄雲のちぎれ」を賛嘆したまでの歌

泣いて叫ぶ黄色無能、黄色無能、アジャ久しく語る子のなき（與謝野鐵幹作）

此「黄」はホンの色の黄でなく、歌は只亂暴な詠み方で賛むれば豪壯とか云ふのだらう。

義和團事件の初まつて列國の各軍、砲を揃へて北京に迫る様になつた時、「戦争文學」の隆盛を鼓吹し、文士歌人の從軍を勸告した鐵幹子の意氣としては之位のものは何でもあるまい。

たけをらを南の支那にやりしかど甲斐なや終に劉坤一立たず（與謝野鐵幹作）

男手に袷衣あはせの破れひとり縫ひて南の支那に秋の雲見る。（同上）

勝手の熱を吹くとか、又例の駄法螺だばらだとか、口善さ惡がない京童の嘲笑あざわらも受けた様でもあり、斯の如き詩想と詩形とが大に發達し得るや否やは、容易に解釋し得る問題ではないが。若し此方面に多少にても和歌の領域を開拓する見込がたつならば、かやうな材料は此人を措いて他に能くする人が今のところ見當らぬのであるから、是非一つ世論や物議に頓挫する事なく研究創作をやつてもらひたい。神、戀、涙を謠ふ役者には今日ありあまつて居る吾和歌壇である。

ねふなわれ白糸たくり機をりて軍の將きみに布たてまつる（正岡子規作）

奔放の勢はないけれど摯實なる詠振である。

右につるぎ左に花環さけもちて往かんは誰ぞ彼得斯堡（杵屋華水作）

われ男の子四億の民をすくひ得ず國の西見て夕に泣きぬ（伊藤天籟作）

うす布にまどへる傷のいえもせでおく霜白し楊村の秋（三浦秋水作）

血に染みしみ旗のこして白旗に君が名見るよ二千里の西（同）

秋水子のは現に北京にありて作つた去年の歌である相な。

昨冬朝日新聞が北清に於ける列國軍の横暴に憤りて、廣く夫れに關する詩歌を蒐集した事があつた様であるが、有明子の新體詩の外あまり目ばしい作物も集らなかつたと見えて、文壇に波動も與へずに了つた。晚翠子の「黒龍江上の悲劇」は黒龍江畔に於て露人が行つた大虐殺の横道を痛哭したもので、頗る慷慨激越の風調がある。

人種の肌の白か黄か差は愛憐の妨げか

神に二つの道ありや、愛に二つの別ありや

「愛の教の一の民罪なき我の血を流し

愛の教の外の民皆其業をよしとしぬ」

異教の民の訴を我願くは聞かざらん。  
 其悽愴の訴を無情の耳にきかん前、  
 震へる魂よひれふして高き至聖の名を思ひ  
 時は遙けしいにしへに返る一千九百年  
 橄欖山の暗に嵐も泣けるゲツセマ子  
 うここに憂の盃うけて祈りし影をあゝ思へ。  
 明星誌上新體詩に一異彩を放つものは平木白星子である。子が「亞細亞」は亞細亞諸邦の衰頹を嘆き白人の侵略日に急なるに東海の慘永く救はれざるのを怒り、更に一轉して。

或は詩客平和を謠ひ  
 天御中主の神の威を  
 いやしき賤の筆にいたゞき  
 一の天をひとしく仰ぐ

人といどの心をつなぎ  
 歐亞互にキビタスダイの  
 鳳鸞翼を合す契を  
 日本の手もて結ぶ日あらば  
 亞細亞の文明第二のあした  
 更に大局を一新せん

と謠ひ來たり。「扇にゑがくニツの巴」の巴の如く歴史は常に繰返すものであるから  
 あゝ亞細亞久しく暗ならんや  
 今や再びめぐりしめて  
 世の文明の第二のあした  
 また日本よりわけをめんどす。(明星第七號)  
 と結んだ、氣魄壯に句法も亦勇ましく。

時代と文學と全然の歩調を同一にするものでは無論あるまいが、時代の一角と文學の

一角とは必ず相接着して不可分のものたるは亦異論のない事。殺伐の氣のみが時代の傾向でないと共に、淫靡の流風のみが一代の風潮でもない。敢て高山氏の時代精神論の先觸をする様にも見えやうけれど、一面の眞理はここに含められてある。

黄の葢を眞白に包む水仙の花あらはれて闇にきえつる（窪田通治作）

文字通りに此歌を説明するならば、全然譯らぬと云ふ者もあるまい。が作者が想つた程に多くの興趣を起すものは少からう。水仙の花を形容して「黄の葢を眞白に包む」と云つた所は、精細でもあり、巧でもあらうけれど、要之厭味である。闇のあなたに水仙の一花のふとあらはれた、と思ふに又直ぐ闇にきえてしまつた。……とかう云ふ風に水仙の神々しい姿を神秘的にしてここに調和を保たせやうとはしたが、何分にも着想が抽象的でむしろ妖怪的で、幻影の描寫が態とらしくて折角の作者の苦心に報ゆべく賛辭に窮するのである。

眺め居れば何時しか五つはた七つ八つともなりぬ一花水仙（窪田通治作）

之は現實の水仙があつたうれを眺めて居る中に、七つにも五つにも花が見えたと云ふ

ので、前のよりは稍々人間界に近い作だ。

ふと見えて消えしは神か水色の御けしさなから夜はわけにけり（篁碎雨作）

神、幻影の歌といへば、明星派の殆んど專買物の様になつて居る。

ろこにあるは誰ぞと云ひて咎めんと思へばあらずあゝ何の影（中村梟庵作）

髪きると向ひし鏡わが外の姿うつると見れば消えたり（鷹見止水作）

夢さめて猶れろろしき眞夜中にも、足おとみし〜と云ふ（佐々木信綱作）

之等はあまり正面の叙述がすぎた爲、或奇怪の事件を三十一文字に説明したの丈ものと成つて了つた。殊に「物の足音みし〜と云ふ」と云ふに至つては吾人啞然良久しであつた。平板なればとて巧まねばとて、此程までに云はずとも思はず苦笑された。

葉櫻の陰さりあへず物れもへはううや何とも知らぬ音あり（服部躬治作）

「何とも知らぬ音あり」と云ふ處に幾分の神秘を含めた積でもあらうか、例の調子で句をやつて輕佻たるを免れたものゝ、縹渺の餘韻がない。

鳥飛んで窓に入つる夕よりあやし我子の物くるはしき（服部躬治作）

亦前に同じく、説明がすぎて多くの感興が殺がれて居る様に思ふ。

かく客觀から幻影、物怪を詠んだ外、自己を直に其幻影中に入れてしまつた詠み方は、又頗る大膽に試みられて居る。

人ふたり眞白き翼生ふと見し百合の園生の夢なづかしき（與謝野鐵幹作）

「翼生ふ」「百合の園生の夢など」、新しがる點に新派の特調があるとしたなら、此歌とて滿更すてゝも了はれまらう。

花は黄に草はみどりによと見れば我は眞白き翼の中に（與謝野鐵幹作）

笛吹くに吹くにいつしか百合多き此國さては海幾つ超えし（同）

夢とも何とも斷はらぬやう、追々思切つた句法を使ふ事が行はれてゐる。

裾さえて葦の眞中に立つと見ぬ天の香をもつ小百合の花の（山川とみ子）

何れ思に耽けた上の事であらう。どこからとなく温かな風が吹く、高い清い芳しい小百合の花の香がする、と思ふと其天の香をもつた小百合の花の形が見えて來て、自分はずひしらず其花中に引込まれる様の氣配がすると、もう裾はさえて葦の眞中に立つて居る

のであつた。自己の姿の登仙するを、假令まぼろしなりとは云へ自己が見るとは一寸可怪い様でもある。理論一邊で行つたなら實に可怪い事であるのだ。だが人間には全く其事はないとは無論限られない事で、「まぼろし」を云ふのが即ち現實以外に、人間の眼に映する他の物のある事を證明して居る。既に人間には「まぼろし」があるものとしたなら、其まぼろし中の人物となるものは、他人もある他人が多くある又自分もある、自分で自分の姿が見える位故うれを「まぼろし」と云ふのではあるまいか。畢竟「夢」と「幻」とは幾何の相違もないとて、吾人が此歌を解して作者自身が花中の人となつたものとする所以は右の如しで、理想の片影を小百合の花に求め得たと云ふ事に釋くのである。尙此解釋及此歌の句法に關する事に付いては、鐵幹子の言を引證しやう。それはいくらか吾人と意見の異なる處もあるに因つて、殆ど作者の意見を代表すると云つても可い位の鐵幹子の説は大に見ん人の参考になると思はるゝからで。

理想界の自己を大膽に歌つたもの。裳裾が臙に消えて、百合の花の葦のなかに立つた女神のけたかさ、美しさ。一句々々措辭が奇警であるので、從來の國詩ばかりを見

なれてゐた人を驚すのには最も恰好の歌である。「の」ぞめは古人にも稀に有つたけれど、兎角わざとらしくかつたのが、此作に至つて初めて成功した。一二三の句の勁拔な爲に四五の句か能く落着くのであらう。云々

此外明星紙上及其同人の中に見えたる「の」ぞめの歌は

我惑ふこれ假初か我惑ふ終にわりなの忘れかたの（與謝野鐵幹作）

「我惑ふ」「我惑ふ」と重要したる爲、句法が輕佻になつて、歌が戀丈で一層疵が明了だ。

見かはしてさしうつふきて含む酒さても冷むたりこれや別の（與謝野鐵幹作）

前のより稍々優つても居様歟、「これや別れの」、「これや」は嫌味である。

遠き空西へ東へ雲の去來君や惑の我や惑の（増田まよ子作）

之は成功した方である。

と思へば分垣をこえたる山羊と思へばどの花よわりなの（鳳晶子作）

之恐くは「みだれ髪」の再版に見出されぬものゝ一つであらう。

ソロモンの榮華の極の時だに、装は野にある其の一花にえ優らなかつたと、偉大の賞賛を得た百合の花は頗る多くの美的聯想を具へて、西歐文士に珍重せらるゝものである。其歴史的感想の添うてゐる儘の百合の花を移し來つて短歌の囊中に収めてしまつたのは亦新派歌人の手柄である。しかし同じ新派と云つても、吾人寡聞にして佐々木氏にありては

たれ折りて塵の浮世に捨にけん奥山陰の姫百合の花（佐々木信綱作）

さ百合さき清水湧き出つる山陰にことしも行きて文をよまばや（全上）

の外を知らず。又根岸派の歌なりとて

村雨のすきし夕を庭にいで、山百合の香を獨り嗅ぐ哉。

の外は擧ぐる事が出来ない。三首何れも「百合」に西洋趣味ありとも思はれず、山百合の香を嗅ぐと云ふは比較的新らしくもあらうが、未だ吾人は其詠振に満足はせぬ。

「迦具土」や「片われ月」や、粗懶遂に精査せず丁つたが想ふに何等の結果も無いであらう。



さは云へど其一時よ眩ゆかりき夏の野しめし白百合の花（鳳晶子作）  
は光彩陸離の榮を謠つたもの。

白百合はそれらの人の高さ想面わは匂ふ紅芙蓉とこそ（鳳晶子作）  
白百合を以つて清き高さ理想に比したので。

白百合を君にくらべんは慊らず餘りに花の冷くあるべし（井上風露郎作）  
之亦白百合を冷き色のと観て詠んだのである。

歌にねてけふ其味を覺えにきあまきはうれか白百合の花（中西やす子作）  
甘き味ある白百合の花を戀に譬へてあるので、以前のと観方に違ひはある。清いと云ふ連想より前者生じ、美しいと云ふ連想より後者生じたので、何れも百合の一面づゝである。只後の「甘きはうれか」と云つて、形容の辭を西洋的にしたので、百合の花との調和に整つて居る處がないとも限らぬ。

匂もれて人のもどきの煩はし袖につゝみて抱く白百合（山川とみ子作）  
御手づから折りて與へ玉ふた白百合の花。其香の高さに人のもどきも煩はしいから、袖

につゝんで抱いて居ると云ふ艶な歌振りで。

京の苞によき紅君へまゐらせん色かへさせな白百合の花（山川とみ子）

歌の意は、京の土産として色のよい紅を差上げやう、が其紅でお歸りになつた後、清い美しい白百合の花を染むる様な、浮氣な事をなし玉ふなど、戯れたのである。號を「白百合」と申さるゝお方が、白百合を巧に使ふのも無理はない。

「みたれ髪」にも「白百合」の一篇あり、其末の

歌をかそへ其子此子にならふなのまだ寸ならぬ白百合の芽よ

と云ふのがあつて例の譯らぬ歌の一つである。

歌よむ子の苦しみ惱みに習ふなど、まだ寸にもならぬ白百合の芽に、云ひ聞せかて居る處を詠んだのであらうか。推し擴めて云へば、書を知るは憂を知るの初、藝術に入るは、惱を覺ゆるの初であるから、中々に會し得ぬ時こそ幸なれ、まだ芽ぐみしばかりの幼き者よ、忘れても我々も習うて此苦惱を悟るなどの意を含めたらしい。下の句が勁拔で此人ならではと思はるる。

吾人が以上略観察せしか如く、色彩を詠せし歌も、紅や紫ならば拾ふも煩はしい位であるが、黄は既に擧げた以外に目新らしいのも認められぬ、其青以下に就て尙記せば、うすもの、二尺の袂すべりわちて螢流る、夜風の青さ（鳳晶子作）

「螢」を叙景的に謠うて、舊來の型を脱しやうと試みた歌で、此作者の常として厚化粧の姫様を出さずすまじ得なかつた。暗に螢の飛び交ふ様を「なかる」と云ひ、其夜の風を「青さ」と形容したは非常に思切つたものだ。「風白し」「魚暗し」などは遠く天明の時代に於て、俳句には詠み込まれて居たもので、たしか蕪村の句に「夕風に螢流る、野川哉」(?)と云ふのがあつて、之を解する時「螢が野川を流る、」様だと云つて笑はれた事もあつた。只「風」を「青さ」と形容したものは俳句にあるまい。暗中の螢光を吹き流す風であるから、「青さ」と云つて或は其情景が活動するやうにも思はるる。

柳青さ堤にいつか立つや我れ水はさばかり流疾からず（鳳晶子作）  
座ろ心に行手をも定めずさまよひ出た柳堤、春は方に闌にして天も地も只どんよりと、南より北へ流る、大河の水亦ゆるうして波風もない。情と景と共に圓滿の歌である。

「立つや我れ」と「我れ」を點綴したる處、作者が女心の狭くして、常に人と我との境を壊り得ぬ小さ「れぞり」の風があらはれて居る。

枝折戸あり紅梅さけり水ゆけり立つ子我れより笑美しき（鳳晶子作）  
などにも其傾が見えるので。

小笠とりて朝の水くみ我どこそ穗麥青々小雨ふる里（鳳晶子作）  
の如きに至つては「我どこそ」の一句でもつて、全首の生命を楔したものである。下半節の叙景も亦廣い、田園の首夏を謠うて遺憾はない。先に云つた「牧場いで、」の歌と共に「みだれ髪」の珍品である。

松青し我世の限り青からん青かれ風の吹きに吹くとも（服部躬治作）  
社會經世家の口吻をかりて云は、之等が健全なる思想であるであらう。

雪ふりて年のくれぬる時にこそ遂にもみちぬ松も見えけん（古今集）  
之れは鬱々たる晩翠を目に見ての作。服部氏か松の我世の限り青からん事を希望して、人の常に「望」あるべく進取的あるべき事を、詠みたるよ比せらるゝ歌ではある。殊に

「青かれ風の吹きに吹くとも」など鍊熟したる曲折の調子は、彼の平板なるものと相并べて優る事數等とせねばならぬ。

雨はれし青葉若葉の葉ゆらきに根なし筑波のかつ見ゆる哉（服部躬治作）

當時の歌人中調子の剛健あるを求めば、此作者先づ其選にあたるべきので、歌ふ處も能く廣い空間を材料とするのである。雨後の緑一しはの青葉若葉が、風にゆれ零に光る其間より、「根なし筑波」……筑波の青いかしら丈が隠見する様、叙景には絶好の材料であつた。惜しむらくは「見ゆる哉」の結び弱さに過ぎて折角の詩材も、大に其價値を失うた。之れ服部氏に似合ない失敗だ。

凝り成せる豊旗雲の凝りあへぬすこしの間に富士の遠山（服部躬治作）

海邊の景と、野外の眺とに違はあれど、風姿甚だ似た所がある。後者も亦下半節に弱い所があつて、此壯大なる自然を謠ふに適し居らぬ様に思はる。それは、「少しの間に」と云ふ句なので、實際雲の間より僅に遠富士が見えたのでもあらう、と云つて必ず「少しの間に」と云はずとも別に叙し方がないでもあるまい。殊に「凝り成せる」の如き

強い曲折のある初句をもつて來て、「豊旗雲の凝りあへぬ」と云ひ下した勢は凄まじいもので、それを受くる四句は充分に達者な剛健な者を用ふべきのに、作者は其用意がなかつたものと見える。

遠富士は闇のあなたに月影は闇のこなたに我は殿戸に（服部躬治作）

此奔放奇勁の句法あればこそ、此廣茫の景に適して雄々しい作物が出来るのである。

ふるやしろ青葉かくれにはの見える森の東を水流れく（金子薰園作）

之れ畫境、之れ俳趣。

「青葉若葉」も古歌人の多く歌はなかつた詩材。

野ははるか夢流るゝにかくるゝに青葉の森の暗さすぎずや（篁碎雨作）

樂しかつた曉の夢の跡を追うて、野外に出た。夢は遠くく流れてしまつてはるかの森に隠れた、何處をそれと尋ねまわらんにも若葉のしげりの暗さにすぎるではないかと、「青葉」の森の暗いのと、朦朧的、神秘的の材料とを調和させた、抽象派の歌。

世や寒さ人やさびしの壁にそひて若葉に暗さ晝の雨見る（有地紫芳作）

花なき跡の若葉である。「人やさびしの壁にそひて」は人の情もさびしい思に鎖さされ、獨り倚りそふ壁と云ふ意で、明星派特意の句法である。「戀に誰れ倚る白壁ぞ」なご様のも亦同じ。

夏雲に誦せん歌をふとまどふ若葉さゆらぎ石立つ處（柄澤いかづち作）  
何の含む處もない歌である。

試みに吹きぬる笛の音のさえに心おどりの青葉窓かな。（窪田通治作）

「青葉窓」は窓前に青葉のしける處。

正調正派の名手が、淫聲を好む俚俗の耳に合はないのを悟つて、一管の笛と共に田園の人となつてしまつた。或日の徒然さに取出して見て試に青葉の窓によりて吹きならした。空は五月の曇り勝に氣壓は下つて、濕り氣の多い空氣はいかに名手の妙音を美しく傳へたであらう。

時偶かりそめに吹た笛の期さぬまで冴えくしいので、自分乍らも聞惚れる程であつたと……頗る着想の清新を以つて賞せらるゝ作だ。

菅笠にあるべき歌としひ行きぬ若葉よかをれ生駒葛城（鳳晶子作）

詩人の旅、梢緑の夏のはじめ、白地の着物に菅笠脚胖の行装。此行装の上からしても歌の一つ二つあるべきところの。うればうれとして詩人が旅する事故、生駒葛城諸山の若葉よ、其新らしい清い香を放ちて待ち受けをなせと云ふ意。

はの見しは奈良のはつれの若葉宿らすまゆすみのなつかしかりし（鳳晶子作）

「ならのはづれの若葉宿」が使つて見たかつたのであらう。

水色の帯ふさはすやみたれ髪の青きに竹の寒さに（増田まさ子作）

苔青く竹寒き處は、悟道に入りたる人の住む處、しかも亂れ髪に水色の帯の世をも人をも恨みわぶ子に、ふさふかふさはぬか、との意。下の句の新らしきを以つて上の句の厭味を打ち消して、面白い歌となつた。

ぬしやたれ桐の木の間の釣床の綱の目もるゝ水色のきぬ（鳳晶子作）

「釣床」を巧に云ひこゝしたは手柄である。初句「ぬしやたれ」など、なせ贅句を使つたものか、之あるが爲、輕佻で厭味で脂つ氣の多いものとなつてしまつた。

明くる夜の河は、ひろき嵯峨の欄きぬ水色の二人の夏よ（鳳晶子作）

「二人の夏よ」とは大膽の云ひ様である。「嵯峨の欄」は嵯峨の水樓の欄の事。水色の衣着つれた二人が、曉の河霧もほの／＼とまだ浪の音もせぬ水流を眺めやつて、其戀の平和に圓滿なるを祝福する處。しかし女史の作としては二流以下のものだ。

犬つれて水色の衣人美し麥の穂末に遠き富士見る（興謝野鐵幹作）

服部氏の若葉青葉の間に筑波山。豊旗雲の凝りあえぬ間の富士山は共に先に擧げた通り。よは又麥の穂末に遠き富士、配するに犬つれた美しき水色の衣の人を以つてして、一望万里の眺めを一幅の畫圖に收めたやう。

淺黄地に扇ながしの都ぞめ九尺のしごき袖よりも長き（鳳晶子作）

舞姫の形容をしたので派手な云ひまわし方丈を見てやつたら、作者は満足するであらう。

結願の夕の雨に花ぞ黒き五尺こちたき髪かるうなりぬ（鳳晶子作）

先に評せし「呪歌かき重ねたる反古取りて黒さこてふを押へぬる哉」の歌と情を同じう

したもので。一心捧げた願望を神も感納まし／＼と見え、結願の夕雨すさまじう降つて、花の紅忽ち變じて黒と見え、五尺こちたき髪も亦自ら輕うなつた。と云ふ頗る多恨の作である。

美しき命を惜しと神の云ひぬ願のそれは果してし今（鳳晶子作）

之亦願掛の歌で修辭は婉曲に出來て居るものだ。解釋に付迷ふ人もあらうが、略云つて見やうならば。美しき乙女が心願の筋ありて、自己の命を捧げて神に祈つた。もし此身の願を叶はせ玉ふとならば、此身の命はそれと同時に召上げらるゝも、さら／＼御怨は申すまじ。命に代へての此御願、是非に感納まします様と祈りに祈つたのである。其精神を嘉みして神も御情を垂れ玉ひ、切なる願は聞届けてもやらう、しかし其代り望みの如く其方の命は貰受けるなどの御告。かくて「願のそれは」は神の御方によりて果してしまつた。次には其乙女の命を召上る場合となつた。乙女は固より覺悟の前であるから惡びれもせず、神の爲すまじに任せんと云ふ。神も今更乙女の美しき命を奪ふ様な、慘い情ない事はしたくない、即ち「美しき命を惜し」と神は嘆いたの

である。此乙女は戀の成就を祈つたのであつて、圓滿なる戀の快樂を破りたくないと思ふ神が苦心し玉ふものと推すれば、一しほの趣味がある。

「ひとつ心を種として」と云ふ粗雑なる定義(?)に満足し、墨守し、更に其埒外に出でんと望む傑人を逐ひて俳句界に入らしめ、小き主觀に小き技を弄し來つた歌人の腦中には、僅々卅一文字の和歌が、こんな複雑の意味までも現じやうとは思ひ浮ばなかつた事である。されば茲に或事件を小説的に組立て、置いて、作者は第三者の位置に立つての詠述法は、亦其人達の會し得ぬ所であつた。

鶉なく眞野の入江の濱風に尾花浪よる秋の夕ぐれ (藤原俊成)

滋賀の浦や遠さかり行く浪間より氷りて出づる有明の月 (藤原家隆)

隅田川簀きて下たす筏士に霞むあしたの雨をしる哉 (加藤千蔭作)

流石に叙景の歌にありては客觀的の描寫を用ひぬではなかつたか、人事的のものに至つては自己を放れて殆んど歌はないのである。蓋叙景は目に見ゆる儘即ち客觀であるから、まだ自己を放れ易いが、人事的の詩材は自ら作らねばならぬ。自らの想像を以

つて或事件を仕組んだ後、初めて三十一文字に盛つて謠はねばならぬ。之れが頭惱の精細でない古人には甚困難の事であつたのだ。とは云へ如何に觀察に精細の缺く所があつても、もししひて左様云ふ風にせなければ、和歌は作る事が出来ぬ、歌と云ふものは一方に叙景及自己を謠ふと共に、一方には人事的の或詩的事件の描寫もせねばならぬと云ふ原則をもつて鞭撻したならば、其描寫も滿更出来ぬ筈はないのだ。只歌は「誠」を第一とせよ巧むな飾るな、作するなど云つた風に、うるる心の感興にふれた儘を詠すべきものと、教へられたので、進んで詩材を自己の腦中に取りらうとはせず、僅に四季の詠物の連想の上に立つて、歌の生命を支へて居たのである。

御手打の夫婦なりしを衣更 蕪村

鮮桶をこれへと樹下の床几哉 全

等、蕪村等は十七文字不足の俳句を以つてすら、能くかやうに複雑の想を謠つて居る。是に因つて見るも明治以前に人事的詠述の和歌が起きなければならぬ筈であつた事は明で、歌人が用語と規則とに制せられた結果、どうく其進歩が今日まで押へられて

しまつたのである。文字の云懸や、縁語の配りに苦心する餘力を少しにても構想の方へ用ゐたなら、かくも單純、平凡、陳腐に歌壇が頽れぬであつたらうに、自己の修養の仕方を誤り、自己の頭腦の進歩を阻み、而かも猶ほ人の歌を譯らぬとか、破格だとか云つて居るのは、甚憐むべき次第で、「時」の進歩は常に此あはれな者を犠牲するは無慘の極である。

雪むろに酒を冷して室守が昔の戀を語る夜半哉（佐々木信綱作）

此人の作で之れ程沈痛の作はあるまいと思ふ。室守が其昔しの戀の苦しみを語りて、はしなくも思出したのは當年の事。怨めしかつた、妬ましかつた數々が、新に今目の前にあらはれて、心もみだれ胸もかきまわさるゝ様になる、それを忘れん爲の玉箒、雪むろに冷し置きたる酒を勧めて、且つ酌み且つ飲む。此場合冷酒が最もよく適して居る。

旅にして佛作りが花賣に戀ひこがれしと云ふものかたり（正岡子規作）

叙述が無造作すぎて感興がのらぬ乍ら、御得意の客觀もの、罪のない作である。

落つる涙友よあやしむこと勿れうつゝに似たる戀物語（鳳晶子作）

染々と聞惚れて居たが友の物語のあまりに我身の現在いまに似通つて居たので、思はず涙がこぼれたと云ふ、眞情のあふれた歌である。殆んど一年前の作で

知らずとて罪にやはあらぬ戀語君に病む子の傍にして（鳳晶子作）

などと共に「みたれ髪」には入らなかつたのだが、女史の同情の優しさは全首に充ちてある。いかにも君は今茲に病む子の君故病むを知り玉はぬであらう、知らぬと云つて誇りがに君は他の戀を物語つてゐる、聞く人聞かざるゝ人の心地の苦しさはどれほどであらう。「君に病む子の傍にして」語る戀物語り、何も其故しらすとて君、罪ならぬ事があらうぞ。憚かり玉へ。其話はやめ玉へと。

同情の厚さを云は、同じ頃の

よわき花の風になやむと聞まざばをりて抱きませ塵ちりとならぬまに（山川とみ子作）  
と云ふ歌である。歌よみの自慢ほくらは由來露骨で拙劣で浮の空で、却つて厭味が生ずる計りである。

春雨の降るは涙か櫻花散るををしまぬ人しなければ（大伴黒主）

花ちらす風の宿りは誰かしる我にをしへよ行きて怨みん（素性法師）

など、何れも櫻の散るを惜んだ歌であるものゝ、櫻の散るを惜んで天下の人の泣く涙が春雨となつてふるとか、風のやどりを尋ね行きて花ちらす無情を怨まんどか、態どらしくて、空涙をこぼしてでも居る様にむしろ滑稽に近い程である。之等に比して見れば山川女史などは歌の善悪は拵置、情が眞實で歌に偽りがあひ。一度吹かれたら忽ち散つて、落ちて、泥にまみれる運命をもつ脆い花なのだ。其弱い花が風になやむと聞いたなら、塵とならぬまにとりて胸に抱きませと、女性のやさしみが讀んで嬉しい程である。

或は云ふ落花を惜む涙は春雨と流れ、花おどす風を仇敵と怨むなどは、ワザと幼き様に云ひ做したので、古人とて其比喩の相匹せざる事や、其怨の報いられざる處を知らぬのではないのだ。と健氣にも駁論する人もあらうればまこと尤もの言條で、如何な古人でも春雨を花惜む涙と思ひ、花ちらす風の跡を追うて、山野を駈廻る様な事は

せまい。無論殊更に幼な様に云ひ現はしたのであらう。唯だ其稚氣も装方がわるくすると誇張となり迂濶となり、遂に輕薄となるものなので。

松の葉の廣かりあばと思ふ哉君と二人の歌書きつべく（久保猪之吉作）

假初に取りたる筆も君が名を書きての後はずてがたくして（服部躬治作）

眞の稚氣とはこんなものを云ふのだ。

白壁へ歌一つそめん願にて笠はあらさりき二百里の旅（鳳晶子作）

藝術の子の稚氣を謠つたものか。白壁へ一つの歌のしるしたさに、笠もなうらうら心に二百里の旅をしたと、科學的に解すれば理窟にあはぬに極つてゐる。下の句諧調が非常に整つてゐる。

殊更に人の心に背きても打たれて見たき夕まくれ哉（中村梟庵作）

之等も稚氣と云へば稚氣であらう。「人」は若い良人と見ても、戀人と見てもよからう。情が過ぎて優しさが過ぎて、不足を云へば張りが足らぬ男に愛せられた、少し勝氣の女で。何を云つても先方では忤はずに音なしのものから、どこぞ物足りない様の氣に



もなるので、殊更に其人の心に背いて叱られて見たい様な心地もする。と云ふ頗る情の籠つた歌。

其人よせめては似たる姿もと雛賣る市にさまよふ夕（金田一花明作）

我につらかつた其人を思にも怨もえせず、せめて似たる姿もと雛市にさまよふ子の、肩も寒う日はくれるのであつた、あはれ彼は誰が名をよんで何處へ行くのであらう。

笛吹きて門をよきりし人の面ある日思ひし其人に似たり（中山梟庵作）

深い〜戀人ではあるまい。ある日ある處で一寸出會つて、何となく心覺えのせらるゝ其人が、笛ふきて門を過ぎ去つたと云ふ、一寸した情ではあるが歌に浮いた處が少しもなす。

「たり」止めの妙所に就いて鐵幹子も云はれたが、確かに歌柄に落付を與へるものである。同じ人の

野かへりの與作のかげのさびしきにえもなぐさめぬ五作を見たり（中山梟庵作）

「與作」「五作」の名も「見たり」の止めで、能く落付いて居る。

似つかしと思ひしまでよ菖蒲きりて池の汀を南せし人（増田まさ子作）

横貌か後姿丈でも見えたのであらう。

「よ」輕佻である。「南せし人」で多少池の廣い事がわかる。「右に行きし人」と云つても歌意は損じまいけれど、左や右と云ふと場所が狭くなるしい事になる故、態と狭くする積ならば格別、茲は、「南せし人」で宜かつたのである。

禮なしてゆきすきし人を誰なりと思へど遂に思出ずなりぬ（落合直文作）

よくある事乍ら、から真正面から説明されては少しとぎまぎもする。

亡き父に似たる翁と語りけり初瀬の御堂の春の夜の月（服部躬治作）

何の奇もない温健の作である。

母よとてあと追ひしきて一こゑをかけまくほしく似たる人哉（金子薰園作）

後姿の似たるに聲かけて、顧みた人のあらぬ貌なるに面赧むる事は、誰れもあり勝の失敗で。此歌「亡き母」に似たと思つたと云ふので、どこにか親子の愛が謠はれて居る。例の音なし詠み振りだ。

れもさしの似たるに亦も惑ひけりたはふれまますよ戀の神々（鳳晶子作）  
「似たる人」の想を捉らへて女史は茲にも其奔放の伎倆を示してゐる。

扱て茲に紹介して置きたいのは根岸派の和歌で。之は近來肝心の子規子の病態急を告げて居る爲、幾らか團體の活動に支障を與へて居る。夫れのみならず誰もまだ自己の作物を一巻にしやうなど、企てし居る人もないと聞く。うれやこれやで其派の歌が吾人の眼に入る事は滅多にない。吾人は再三言つた通り派の異同を頭に置いて本書を書くのでないとは勿論、彼に此に厚薄をつけ様どの考は聊持たぬ。「明星」派の歌を引く事の多いのは其派の歌が多いのと、統一してゐると、比較的新趣味に富んで居るのと諸々の原因から來たので、明星派が神や、戀や、色彩に關し、特調をもつて居る事は以上述べ來つた通りである、今度は根岸派が叙景の様子を少しく觀察して見やう。之も前云ふ通り材料に窮して居るから、いつその事昨年四月中日本新聞で公になつた、募集短歌「櫻花」に就て一班を掲げ、尙交ふるに他の歌、及此派以外の人々のをも併せ評釋する事とする。

淤泥の花くひもちて燕の塗ごめの巢に塗りこむるかも（秀眞作）

櫻の花の趣致を燕の巢に認め得た手柄は、他に百首の櫻花の歌を作つたよりも大なるものだ。「塗籠の巢」の造語も面白い、之等が古語古調を應用した妙諦であらう。

亂れ散る櫻の中に眞金ふく高火床つきて釣鐘鑄るも（秀眞作）

櫻花燎亂の下高火床を築いて鐘を鑄る。火床の火花は櫻とちり、櫻は火床の火と落つ。

しのため大宮人の引き放つ小弓の風に櫻ちるなり（巴子作）

之は又堂上の落花、

天つ風いたくし吹けば海人の子があびく浦曲に花ちり亂る（左千夫作）

漁村の落花。今曳き上げた鯛の中の美しい魚は鯛であらう。

花ちるはまこと惜しいものに違ない。落花に對して榮枯の感を興さぬものも少くはあ  
るまい。惜しむから惜むも可、榮枯を感じるも悪いと云はぬが、單に落花の詩美はろ  
こにのみとゞまると思ふは大違ひのとである。うの美しい花がひら／＼と散る様が惜  
しい哀しいあはれだと云ふ外に、舊派の歌人達の目には入らぬと見える。偶々云へば。

櫻ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪を降りける  
など様のものを絶唱として賞賛して居るので。そんな人達にはかゝる新境の落花の雪  
でも眺めさせてやりたい。尙

又しても嵯峨の櫻の花吹雪牛飼舎人遅れ來にけり（服部躬治作）

ほのくど篝しらみて白みゆく敵の砦の櫻ちるあり（全）

春風に櫻花ちる層塔の夕を鳩の羽に歌うめん（鳳晶子作）

相逢うてたま〜語る旅館、たそや笛吹く落花の夕（前田林外作）

用語が同じからず調子に違があつても、落花を謡うて舊窠に陥らなかつたのは何れも  
見事の手柄である。

大八洲國いや高にいや廣に春は櫻の花さきはこる（岡麓作）

日本國中の花を一首の中にこめてしまつた大柄の歌振で。もし此派の人で「櫻集」と云  
ふ歌集が出来たら先づ巻頭の歌であらう。

上下の和ぎ遊ぶ春山の櫻は禮に樂にまされり（岡麓作）

木を伐り山を開き、丘にも畑にも野にも市にも、櫻を植うる事三十三萬本、春爛熳  
の時は五歩に一几十歩に一亭。農には鋤をすてさせ、商には暖簾をたゝませ、匠は鑿  
を抛つべく兵は砲を地に埋めて、只花下に憩ひ花下に眠り花下に食はしめたなら、其  
時ぞ東方の君子國世界の樂園ともなるのであらう。

岡の上に天しのぎ立つ御佛の御肩にかゝる花の白雲（正岡子規作）

美妙の御相に立たせ玉ふ御佛の、御肩にかゝる櫻の白雲は、直に光明十方の極樂世界  
を現し出すのであつた。

御相いと、親み易きなづかしき若葉木立の中の盧舎那佛（鳳晶子作）

之は御佛を主にした歌で、句法の奇にして粗ならざるが得色である。

八百はたの大尺絹に糸がきたる櫻月夜のヅイナスの神（安江秋水作）

みづのえの吉野の花の花の瀬を彩りかける其玉くしげ（巴子作）

共に畫ける花。

大君のみことかしてみ三吉野の花さく頃を百濟へ行きぬ（格堂作）

みれやまつる勅使はたてり畝傍山山の櫻は今かさくらん（椽西坊作）  
勅使を送る花。勅使を迎ふる花。

のう／＼うれを折らなくあれと云ふを鼻もてあしらひ花をる醉人（哲壽作）

花の下に面かゝぶり舞はんにおカメ ヒョットコいづれにてもよし（霞町人作）  
之れ根岸派特異の滑稽趣味である。

彌次郎兵衛は馬に跨り北八は荷物背にして行く松林（濱人作）

法師等が高座の上に法どくは手付假聲歌舞伎見る如し（讀人不知）

など何れもうれである。

君が倚る朱の欄に夢更けて雪洞の火に櫻ちるなり（正岡子規作）

先にも一度引いた歌であるが、之は「艶麗」と云ふ題にて作つた中の一つで、此外

美人問へば鸚鵡答へず鸚鵡問へば美人答へず春の日くれぬ（正岡子規作）

青鳥の孔雀の鳥が笠の如くうち廣けたるしたり尾の玉（同上）

などがある。

啄みて孔雀は殿に上りけり紅き牡丹の尺ばかりなる（與謝野鐵幹作）

岩の上へのぼる孔雀の尾にふれて牡丹二ひらかさなり落ちぬ（落合直文作）

何れも孔雀に牡丹を配合して豊麗の作だ。

新派起つて以來和歌の諸體凡て發達した中に最も著き進歩は艶麗體の歌である。若い詩人が若い胸に描く、人や花や草や木や、何れか艶ならざる何れか麗ならざるものがあろう。殊に女流作家の多き明星派に於ては、冲淡閑雅の調は容易に求めて得られな

い。加之色彩を藉り花を藉り、抽象を具象にし主觀を客觀にするは亦歌をして、艶ならしめ麗ならしめた一原因である。

百合の香にあま戶外くる露の朝夢かのさまの蝶と人と見る（與謝野鐵幹子）

百合の香の芳はしい、露の滋く籠めた朝、雨戶外の土椽のあたりを、蝶が一羽乙女が一人。何れもまだ夢から全く攪め切らぬ様の形容を描いたもの、此人にして艶なる事斯くの如くである、鳳女史に至つては「みたれ髪」一冊悉く艶麗の體である絢爛を極めてある。

人にそひて今日京の子の歌をさく祇園清水春の山まろき。(鳳晶子作)  
湯上りをお風召すなの我上着ゑんじ紫人うつくしき(全)

此外人事的の作物——戀の歌に至つては何れも悉く皆其體、今殊更に茲に擧ぐる必要もなからうと思ふ。

五年のつらさ嬉しさ夢にして今日を限りに別るべき身か(佐々木信綱作)

別れねはならぬ身とは兼て知つて居乍らも、今日別るゝとは思はなかつた。辛かつた嬉しかつた五年の行迹を夢にして、今日別れねばならぬ身となつたのである。今二人茲で別れたならいつの會ふ日が頼まれるであらう。

歸り來れば君はとつきぬ花はちりぬ何に歸りし我身なるらん(佐々木信綱作)

再び際會の日を心頼めに歸り來れば、故山の風物夢と云ふもあまりに果敢ない「君はとつきぬ花はちりぬ」で、全く望なきさまを茲に現はしたまでは妨げぬが、「何に歸りし我身なるらん」は拙い。或人に云はすれば、手品師の種を見せた様のものであるとの危言は免れませう。

嫁けりし一の娘宿とへば桃はちりけりちりてなかりけり(服部躬治作)

かく云ひ下して餘情を含めたものと作者は自負するでもあらう。しかし吾人は「桃はちりけりちりてなかりけり」の情熱をいよりは、「何に歸りし我身なるらん」と打ちつけに云ひいでたるを比較上取るのである。

郷人に隣やしきの白藤の花はどのみに問ひも兼ねたる(鳳晶子作)

之は自身は都わたりに流浪ひて居る場合なので、前二首とは情を同じうして境を異にして居る。

夕づく日とすれば葦にかぎろひてしくる、中を君が船行く(服部躬治作)

「君が船行く」で別の意を含めてある「夕づく日とすれば葦にかぎろひて」、迷ふは霧か霞か波の煙か、折しもの時雨はさびしく舩を撲ちて、亦別れを悲しむものゝ様。情景並び至つた作物だ。

いつか又かへりみるべき曙の霞にきゆるふるさとの山(佐々木信綱作)

郷を出で、東一里の見返り坂、これを名残と見返した故郷の山々。霞が立つて横にな

びいて、見るが中になづかしい其山や川や森や林は眠るが如く見えわかすなつたのである。去りもえやらす其子はいつまで立ち盡くして居たのであらう。

音たて、踏むにくつる、霜柱母に別れて國を出で、行く（窪田通治作）

失意の子の首途。引締めた草鞋の足の踏むに亂れて見返る子、見送る母。上半節霜を藉り來つて凄絶の音をなし、下半直情一絲巧ます飾らずして哀婉の調をあして居る。

さらばなり子はいたみもつ此門出母よ世によき名をしひますか（靈の子）

功名の巷に立つて富貴榮華を争ふ程に、世に望める子ではない。除く可らざる苦悶を胸にして今茲に閨門を出づる我、落魄と流遇とは母よ今から許して、立身出世を強ひますな、と之亦同じく失意の子の旅出である。

云はずさかず只肯きて別れけり其日は六日二人と一人（鳳晶子作）

何か云はうと思つても、何か聞かうと思つても、もう胸が一杯で舌が強ばつて、互の幸を祝福する其詞さへ得云はぬので、何も「云はずさかず只肯きて」別れたのであつた。下の句は其日は六日で二人と一人とが別れたのであつたと云ふ丈の事。有りふれた添

景をして却つて情を壊るよりも、打ちつけに云ひ下して餘韻をこめた方が巧妙の手段であるのだ。

わかれ云ふ友をば門にまたせ置きて月のあかりにかきし歌哉（金子薫園作）

く人、泣いて涙見せぬ人、云はず聞かすに見送らる人、別の門出は人生悲惨の活劇泣である。ねよう天下に此歌ほど香氣な離別は恐くはあるまい、「別れ云ふ友をば門に待たせ置きて」、月のあかりに歌を書いている主人公の頬には、歌の出来よさに微笑の浪さへ見えた事であらう。

亡き人の柩いたきてたゞひとり夜寒をわぶる瀛車のうち哉（金子薫園作）

「亡き人」と云ふからは、何れ兩親か子供か妻か、兎に角身に親しい人の事であらう。其人の柩を抱きて夜行列車にのつてる、其夜其時の感懐が僅に「夜寒をわぶる」の七文字の外はなかつたのである。試に思へ「夜寒をわぶる」などは、一寸一晚掛の道中に多少寂莫を感じた時位に云べきので、決して此歌の様を悲痛此上もない折には使つて役に立つ詞ではない。作者か「鶯の初音さ、たり簾かけの道」の想に安せず、恚る激切の落想

を捉へんとするは、實に失禮乍ら身の上しらすとも云ふべしだ。

さりけなく我を送るに我堪へず今宵あつちなから天地裂けな（酒匂菱華作）

苦しいつらい我の思をえしらぬ様に、さりけなくも我を見送る君、かくつれなき人であるならば別れて後の事も思ひしられて、我今此處を去るに忍びぬのである。あゝむしろ天地震動し潰裂して我身も彼君も諸共に、死なば萬事休して心も中々安まるであらうと、下の句勁拔に出來て居る爲、形と想と相和して居る。

鐘なりぬ次の撞く手はたゆたへよ今ぞ別の我は野に立つ（長谷川濤涯作）

稍こしらへ過ぎた様にも思はれるが、哀んで傷らざるの情は鐘に怨んでしかも妬まぬところよあらはれて居る。鐘と云へば曉か入相かに極まつて居たのであるを、茲に別の時に用ひたのは用意頗る新らしかつた。

一枝の野の梅折らば足りぬべしこれ假初の假初の別れ（鳳晶子作）

一枝の野の梅折つて夫れで別の意を表すればよいと云ふ程の、假初の別れ。其一寸した別れだと云てるが中に滿更別を惜むの意がないでもない。「之れ假初の假初の別れ」

と云つて、語を重ねた處に別の意が強くなつたからなので。

明日やかの雲ゐる山にふりかへり君ある方をいづこと詫びん（大井鶴林作）

別後の情を思ひやつた歌で、詞はよく整つて居る。「いつこと詫びん」は巧に云ひまわした。

明日を思ひ明日の今れもひ宿の戸による子やよわき梅暮れうめぬ（鳳晶子作）

意は前と同じかれど、彼は出で行きし人の明日の見返りを云ひ、此はとゞまりし人の明日の思出を云つて居る。「君ある方をいづことわびん」と抽象的に情をのべ、「宿の戸による子やよわき梅くれそめぬ」と景をかりて情をうつして居る。造語の上の比較論は云ふも無益である。

清き乳や子の勇ましき朝なきやさいへさびしき別れの車（與謝野鐵幹作）

別るゝ人をかやうに形容したのが第一珍らしいので、其出で行く人が子をつれた若い婦人であるのが新らしい所である。

歌に名は相問はざりきさいへひと夜えにしの外の一夜とおほすな（鳳晶子作）

若い詩人、うら若い女詩人、歌の上に名も聞はずに別れた程のかりそめの一夜の宿、ろくにえも云はれぬ趣味のあるのが戀ではないか。この一夜、此假初の一夜、ふれが幾萬劫の宿世であるかも知れぬ。(鐵幹子評)

之に似たのが

云はす聞かずあゝさり乍ら人とわれ古河の一夜を笛にたゞ見し(篁碎雨作)

の歌で、之は音楽家仲間のとであらう。先の歌の「さいへ一夜、一夜とれほすな」と「一夜」を重ねた修辭に忘れ難い情が溢れてゐるならば、後の歌の「古河の一夜」と地名を持つて來て句を落着かせた處に、真情がこもつて居ると云はねばならぬ。

此處に吾人は新派歌人が謠うた哀傷の歌を掲ぐるに當りて一言したい事がある。繰り返しても云ふが新派歌人は概ね青春今方に盛んなる人達である。戀を謠うて別を謠うて、艷麗妍華を競ふのはまこと當然の事で、哀傷や辭世や冲淡や閑雅や皆其成を他日に期すべきのである。されば新派の歌數多しと雖も「死別」に向つて瀧いだ觀察はあまり澤山はない。

玉椿手向けしぬしの名を云ふな悲しき柩美しき柩(紫)

くさくさの色ある花にようはれし棺の中の友美しき(みたれ髪)

「紫」と「みだれ髪」とに見えたる「死の友」の歌はこれ丈げであつて、之等を直に哀傷の歌と云ふには憚ある位。で澤山もない中をしひて詮索して來ても畢竟徒勞であると思はるゝから、通治子の「母の喪」十五首、紫袖の子「終焉」十八首、がまどまつてあるを幸ひ、取つて以つて新派の代表としやうと思ふのである。

さりどては御柩昇けの召なりき山越七里うつゝの旅(窪田通治作)

母の病危篤なりとの電報は宵闇の戸を叩いて、何とはなき心怖に夢も結ばぬ中を起したのであつた。胖はくまも惜しう草鞋の紐も結ふか結はず立ち出で、七里の山越も行手の闇の心急かれてうつつなう。歸り着けば今の先刻御魂はあの世へ上り玉うたと、弟が出迎様のれろく聲。さてはあの報知は此世の御姿を拜めどにはあらで、遺骸を収めた御棺かけよどの召であつたのかど。今はの一目に遅れた人の無念さを歌つたので、句々活動して情韻縷々として盡くる極みがなす。



一言に我世送りし君としも思ふに御手の早も冷えつる（平塚紫袖作）  
終焉の一言は其生涯に於ける運命に最後の宣告を下して、名や戀や妬や凡ては茲に闇なる旅の首途かと、さしよるに其手は既う血の氣もうせて冷えを覺ゆるのであつた。

と思へば早も此世をいなすらんれこそかなる氣我身をおそふ（窪田通治作）  
之亦今はの折の光景。今や終りの呼吸であると思ふ時、一種嚴肅の氣に襲はれて身心も引きしまる様の心地がしたとの意。

かつ見しは君に名殘の黒髪のさゆらぎ絶えし面影なりき（平塚紫袖作）  
今はとて母の御貌に袖かさし運命の前に眼とさしぬ（窪田通治作）

臨終際の一刹那。黒髪のさゆらぎ絶えた面影を見かへしたのは其人が戀人であるからなので、御貌に袖かさして運命の拙きに泣いたのは、それが母人であつたからなのである。

姉よ涙かくし玉へお此宵をかぎりの母やまどひますらん（窪田通治作）  
さらばとも天なる笑に一人あらばこゝや小の我幸ならん（平塚紫袖作）

忘執のもしや迷ひもし玉は中々に辛さをますばかりぞ、一は涙かくし玉へと姉に勧め、一は「天なる笑」を受け玉へと亡き人に望む、之所謂同巧異曲なるもの。

さりとももの惑ひ心地や君ありと一人に問はん力だになき（平塚紫袖作）  
誰れきめてひと世と云へる我のみはまた逢はん日の母に有りと思ふ（窪田通治作）  
一は此世におはさぬとは思ひ知り乍ら、又してももの惑ひ心地に堪へ難ないので、人に問ふ程の力もなく、獨り惑ひ獨り思うて居る、と云ひ。一は親子一世の定めを疑ひて、又會はん日の必ずあるべきを堅く自ら信じて居ると云つたので、何れもうつゝ、まばろしに、迷うて居る情。

門火もえぬ野邊におくりの鐘なりぬ見かはす顔を姉と背けぬ（窪田通治作）  
一語は一語より急切一句は一句より激越。一句目三句目五句目悉く「ぬ」を以つて疊み上げて、痛絶凄絶の作品、又多言を加ふる必要もないのである。

明星誌上で異彩を放つ二氏が其抽象的思索に富む資質を以つて、人の終焉を諒つた。其全體を煩しく駢列せずとも、其手振が如何に美しいものであるかは以上で大方は推

せらるゝであらう。

せわしげや氣疎き人や小き村や何を故郷親はなき我れ（窪田通治作）

俳諧寺一茶が故郷を罵つた「故郷や西も東もばらの花」の句は、俳句丈で情がのらなかつた。今此歌によつて此痛快の聲を聞くを得たのは、吾人が作者に對し少からぬ感謝を捧げる所以である。

錦きて歸るか人の羨まし親を泣かせて我は病みたる（金子薰園作）

名の榮と譽の彩とに包まれて、錦衣歸郷の子を羨むのは一般の情で。

これやわが残りの幸かうらふれし旅の姿を泣かん母あき（窪田通治作）

に至つては零丁孤萍の我れ我を顧みて、自らのうらぶれ姿に泣かん母なきを却りて喜び、涙を噛みて「残りの幸」なりと謠うたのである。彼と此とを比べやうと思ふ人は須く相誦吟を重ねて、作家の苦心の潜む所を察し玉へ。

歸りこん父まつ程のなくさめに母あき子等は蚊遣をぞ焚く（服部躬治作）

何の働きもない句法に例の客觀的描寫。しかし母のない子供がさびしげに、蚊遣を焚

いて父を待つてると云ふ、一通りの叙景は出來てゐる。此人の挽歌八首中見るべきは。

黄泉なる高きに上り願よこゝに人あり君を戀泣く（服部躬治作）

と云ふ一首丈である。

かなし子を柩に入れてなこりうと眺めし時の君をこころねもへ（金子薰園作）

之は人の幼子の失せしと聞いて詠みたるもの。

美しくしの其髪とはの君なりと丈なる程をこん世に待たん（平塚紫袖作）

之亦「幼き人のなくなりしに」と題してあるもの。美しい其髪をいつまでも君として見やう、其幼き内に失せ玉ふたから「丈」にまでのびる事丈は來ん世をまたうと云ふ意、「とはの君なりと丈なる」の續き柄新らしい句法である。世人はむしろ前者の譯り易さを真情ありとして取るやも知れぬ。

母君の今はのときの御詞に何とありしを我に聞かせよ（久保猪之吉作）

はやもねよ身に毒ありと云ひませしそれよをはりの御教なりき（窪田通治作）

敢て贈答の歌ではない、只かう並べて見ると何か前後の關係でもあるらしい。

をさめたる棺の上にあらけなく搔きれとす土の音の悲しさ（佐々木信綱作）

斯の如きの材之れ此人の能く詩化し得る所でない事は、先に金子氏に就て議せし言を持ち來つて、亦此人に當てよからう。「搔きれとす土の音」を「悲しさ」と云つてしまつては、何等の含む所がなくなつて了ふ。

をの子なり御棺深くをさめては埋めんの土もかきれとしつる（窪田通治作）

「かきれとしつる」で言ひ切つてころ、其時其折の悲慘なる光景も想はるゝのだ。

かれくの櫛の枝に露れちて松風寒しおくつきどころ（佐々木信綱作）

一般に墓場を叙景したので

大和國高市の郡目も遠し荒れたる墓のこちくゝに立つ（窪田通治作）

滿目荒寥の景、惘然として獨りイむ遊子は今はた何を思つて居るであらう。

野の雉子山の雉子も今はなけ御墓あれたり葎みだるゝ（窪田通治作）

「いらか破れては霧不斷の香を炷き、とほそ落ちては月常住の燈をかゝげ」。墓守の翁

十年の昔に同じ御墓の内となつてからは、草はあるゝに葎はみだるゝに任せて、誰一人落葉を踏んで墓前の苔に跪かうとするものもない。野にゐる雉子、山になく雉子、情あるや否や、古昔の王の御惠を忘れずば。訪ふ人もない此墓の王の爲聲たてゝなけど、作者がいつにかはらぬ哀痛の音、慘として耳に迫るのである。

言ふべくはゝゝに一人とみ墓なでゝ想ふにいつか森たそかゝる（平塚紫袖作）

墓上の土をぢでゝ相共に語らんとする想に、とざされて居るうちに日も夕となつたと云ふ、太した情熱もない歌で。「來島恒喜の墓に詣でゝ」と題はあるものゝ、なきをまされりとする。

ますらをのおくつきあれて五百年功名富貴春の夜の夢（佐々木信綱作）

字音を入るゝには其用意があり、漢語其他調子の重い用語を使ふには夫れゝの法がある。只無暗に、「五百年」「功名富貴」などと怒鳴つて見ても、全體の調和如何に意をどめず唯無意味に使はれては歌の拙さは兎も角迷惑は後進の人にまで及ぼす。假令實際の伎倆はどうあらうと、佐々木信綱と云へば歌讀の家に生れた所謂玉子からの歌詠で、

竹柏園の主人で、歌學全書の編纂者で、そして夙に和歌の新趣味を鼓吹して居る人であるとは、誰も〜認めて居るのである。其先輩な高名な佐々木氏の歌が、こんな粗勿な蕪雜な無用意なものであるとしたら、氣の早い世間の人達は一概に、新派とは皆かくの如きものであるなどと早合點もするであらう。氏が叙景以外叙情以外——つまり叙情であらうけれど——和歌に理窟を詠み込んで居らるゝ、それすら歌の一體として吾人は敢て排斥しやうとは思つて居らぬ。それなら其様に山を張らずに、其御得意の小主觀を御特意の平板の調子で謠つて居られた方がよいので。牛若が辨慶の眞似して七つ道具に大薙刀、擔かつくも持つも關はぬが一步もそれでは歩まれまいと思はるゝ、夫れ故革新の風を望んで起る後進の人々が

うね〜と横山十里雨はれてちきれ〜に白雲かゝる

見渡せば四百餘州に雨はれて崑崙山頭雲ちきれとぶ

斯様のものを作つて、武者ぶつた名乗を署して、麗々しく新聞に出して喜ぶ様にもなる。吾人は先輩佐々木氏や落合氏を責めて、屢々其忌諱に觸れるのも顧みず、尙直筆

して止まないのは實に右の如き、夫の人の子の誤りを正してやりたいからで、本書編述の目的亦茲に存するのである。

されば敢て佐々木氏に訓ふとは云はず、吾人は用語、句法に就いて少しく云つて見たらと思ふ。

元來我國語の性質として優麗はあるも豪壯はない。花に泣き雨に憂ふるの時用ひて以つて其優しみを舒べる事は出來やうが、波に哮りあらしに荒あふには、とても縦横の描寫が出來ぬのである。かく云ふ時は論者は口を歪めて「古事記」素盞雄尊荒びの段をもつて來て、之れあり〜世人皆能はざるにわらず、爲なさるなりと云うでもあらうが、稀有の一例は全體の例外である、一二の反證があらはれたればと云つて、原則に動ゆるぎを生ずるものではない。まして用語を限り雅語と俗語とにきびしい詮索をした歌學界に於ては、少しでも調子の重い用語を排したものの故、一層詞のやさしみが加はつて、それと共に強みが去つたのである。かく詞はやはらかに従つて着想までやはらかなになる、やがて調子がたるむ歌の領域が狭くなる。衰頹、陳套の大勢は容赦なく押し

寄せて遂に明治の衰運を來たしたのである。

故に和歌を實際に於て革新しやうと云ふには、先づ用語の制限を打ち破らねばならぬ。俗語は俗語なりに、漢語は漢語なりに、片端から遠慮なく用ゐる事が革新の第一手段である。しかし俗語を用ふるなり漢語を用ゐるなり、用ゐるには用ゐる様にせねば、折角の歌が全首不調和となつて諧調の美を失つてしまふ事があるのだ。

御相いと、親しみ易きなづかしき若葉木立の中の盧舍那佛（鳳晶子作）

「盧舍那佛」の語を詠みこなしたのが此歌の妙所で、かゝる語路の悪い名詞を讀み込んだ歌の姿は亦うれ相應に出來て居る。即ち「御相いと」の初句からはじめ並々ではなから、「親しみ易き」「なづかしき」と一句毎に「き」を以て強い初句を受けた。四句目に至つては頭に一二三の句の重みあり、下に「盧舍那佛」の名詞あり、作者が幾度かの洗練を要した所であらう。常なれば「若葉かくれの」など、云ふ所であるのに、「木立」の二字を捻出し來つて千鈞の重みを與へ、「若葉木立の中の盧舍那佛」で、曲折の妙を盡して此歌の聲調完きを得た。

酒をあげて地に問ふ誰れか悲歌の友ぞ二十萬年此酒冷えぬ（興謝野鐵幹子作）

「酒をあげて」と初句の六文字が、充分に下の句に調和する丈の強みをもつて居る。

「誰か悲歌の友ぞ」の適勁を以て「二十萬年」の語を引きだし、「此酒冷えぬ」と「ぬ」を以つて一刀兩斷の鐵案を下した。さればこそ「悲歌の友」「二十萬年」の語も能く調和されて申分のない形式が出來上つたのである。

手をのべてとらはやとしも思ふ哉斜になりぬ北斗七星（服部躬治作）

之亦「とらはやとしも思ふ哉」「斜になりぬ」と云ふ、何れも高調の句法が下の「北斗七星」に對して調和を保つて居るのである。

然りと雖比較的に適不適を云ふならば、歌語となるべきものと歌語となす可らざるものとはあるが、絶對的に此語は歌語でない、此詞は俗語だと初めから分ちはずつくものでない。それを分たうとすればこそ、歌語の欠乏思想の狹縮を來たすのである。と云つて何の用意もなしに何の撰擇もなしに、どの詞でももつて來て歌が出來るものではない、歌は出來ぬでもあるまいが巧に歌が出來ない事はさまつて居る。故に比較上歌語

にして困難を感せぬ語と、歌に入れるには餘程の注意を要する詞とがある。それを考へず新派の自由なる一方にのみ眼をとめて、不調和も不統一も、一切頓着なしに難語難句をばらばら、新らしいとし珍らしいとして喜んで居る人達は、少しく顧みる所あつてはし。

鎌倉は小さくはかなき夢の跡よまた頼朝の脊を拊つな君（與謝野鐵幹作）

實朝の歌はいやしと語り乍ら御墓の霜を掃ひて過ぎぬ（前田林外作）

三百年前、頼朝の脊を拊つた太閤は、元龜天正の擾亂を治めて統一の大業を成し遂げたのであつた。今日の文界は麻の如く亂れて適從する處を失つてゐる事は正に天正の昔にも劣つては居ぬ。少くとも和歌壇の紊亂を收拾する事業が出来ないなら、徒らに鎌倉の小さくはかなきを罵つたところで空威張だ。吾人は鐵幹子の如きが空威張に了はらざらん事を望むや切である。

「征夷大將軍」としての實朝は、未だに誤解の中に葬られ、歌人としての實朝は金槐歌集一卷に現れて、永久の光を放ちて居る。劍戟の子と藝術の子と何れを撰び何れをす

て、よいのであらう。「實朝の歌はいやし」と云つたら反對論も盛にあるに違ひない。

はこらしく其手とらん誰れかある安しや君は昔の下なり（窪田通治作）

手を翻せば雨兩手を翻せば風、紛々たる世上の交際、利の友、名の友、權柄の友であつて、陷擠と猜疑と中傷とは、播かれ培はれ、芽ぐみ枝生と葉しげるのである。墓中の人を羨み、平和なる地下の友を吊ふ中に、作者は其人生觀を謠つたのであつた。

せきあへぬ人のなげきもありけむかかくはさびしの一基ふる塚（水野蝶郎作）

誰あつて祭る人もなく、香一炷花一本のそれすら捧げられもせず、草に任せたる一基の古塚。今こゝろかくは寂しくもあれ、墓中の主が今はの際の枕邊には、せきあへぬ人の歎の数々もあつたであらう。世にある時の榮華に盛衰ある如くなき世の後も同じく、昨日と今日とに違ふ事を咏嘆したるもの。何程の奇あるならぬとすて難い點もある。

かくは世にかやく才ももうづもれん夏野の塚におしへきかずや（水野蝶郎作）

前の作を尙具象的に云つたのと同じく見てもよい位。秀才の末のかくはさびて名残を一基の

塚にとゞむるにすぎぬを見る人、多少戒むる處あつて然るべく。榮耀に眩んで「怖」と「慎」を知らざる才人は、來つて此墓があらはす「無言の訓」に耳傾けずやと云つたのである。

人の世に才秀いでたる我友の名の末かなしけふ秋くれぬ（鳳晶子作）

秋のくれと秀才の零落とを相比したのは、どこまでも新趣味の上に立つてゐる價值はあつたが「人の世に才秀でたる我友の」と云ふ句は、修辭に満足せられぬ點がある。今日の作者であつたなら、こんな長々しい詞を使ふ氣遣はない。

天の才こゝにはほひの美しき春をゆふべに集ゆるさずや（鳳晶子作）

天才を直譯して「天の才」とは佳い造語であるか否やは扱置、前のと相くらべ見て一年間の作者の進境を知るの便ともなるであらう。花に鳥に霞に菜の花に春賑かなる夕、天才の胸に湧いた美しい詩を集にしたいと思つたと云ふ意で、

人の子の名ある歌のみ墨ひかで集にせばやと思ふ秋かな（興謝野鐵幹作）

の露骨をさけて、「……にはほひの美しき」と云ひ「春を夕に集ゆるさずや」と婉曲に

叙した處は、頗る巧妙に出來て居る。

詠み人のしれざる春の秀歌哉 子規

之は集になつてゐるのであらう。「春の秀歌」で其歌の懐しい奥床しい感じが催されるのだ。「秋」と云つたら只純潔とか高朗とか云ふ連想のみ起つて、温かい趣のある其「秀歌」に不調和となるのである。

若き子のこかれよりしは鑿の匂微妙の美相今日身にしみぬ（鳳晶子作）

藝術に戀する若き子の情の、吾人は又慕はしく思ふのである。

我爲のしはしを人のなげ島田此手鑿の手ことさらあらき（篁碎雨作）

之は藝術家自身を詠んだもの。

鐵幹子評し得て頗る精細である曰

新詩社の同人が去年の夏までは「妹」と云ふ古語をすてかねて居たが、次には「君」と改つて、今夫も陳腐になつて専ら人と云ふ事が行はれてゐる。ここの「人」は其情人の事である。

情人を暫くと云ふので、モデルに立つて貰つたのだから、當人は嬉しいやら羞しいやら氣が氣でない、覺えず鑿もつ手が常に似せわしいと云ふ趣向。極あどけない初戀時代の歌。「投げ島田」の意氣なのを挿んで印象を明にした爲に、「ことさらあらし」と云ふ抽象的の句が活々してゐる、斯う云ふ嶄新な材を捉へて輕佻にあらなかつたのは全く一二三の句に説明的の動詞を省いた修辭の功である。

作者が美術學校に學んで居る人だけに、殊更この作が面白い。云々

藝術家、詩人などは其名計りでも美しい連想を起させるもの、之を短い形式の和歌に詠み込む事は、頗る賢い手段であるから、近來うれを試みるものが少くない。

みやこより來つる畫工宿らせて亡き子かゝする村長の君（佐々木信綱作）

一年を此子の姿絹にならず繪の筆すてゝ詩にかへし君（鳳晶子作）

さはかりも紅の繪の具を湛へたる繪師の若きに酒をしひばや（窪田通治作）

客觀的に畫家を詠じたもの。一つ／＼に作者の特長があらはれて居るので面白い。

ようほひし京の子すゑて絹のべて繪の具とく夜を春の雨ふる（鳳晶子作）

こゝしばし我に許すの絹たまへる負へる日傘に母はこもらじ（平塚紫袖作）

畫家は何れも美しい青年畫家であらう。

「まはゆい様な京の舞姫をモデルに居ならばせて繪筆とる」繪匠の君の、頬のあたりは上氣して、ホンノリと色にあらはれたのであらう。後の歌は旅から旅へ自然の風光を自家樂籠中のものとしやうとの、健氣な繪師の君が、ある日ある處に美しい乙女に出あふた。戀と云ふまではなくとも、なづかしい慕はしい思に堪へ得ず、乙女を呼びよめて「我に許すの絹たまへ」と願うたのである。「負へる日傘に」云々は、今君が我乞を容れて絹たまはるとも君の手にし玉ふ日傘の中には、まさか母君もおはすまいから何の懸念も入りはしませんと、繪師が乙女に云ふ語である。「絹たまへ」と云つても田舎娘に絹繪を乞うたものとして解すのではない。「繪師より少女へ」と云ふ題だから、修辭上畫の上の用語を用ひた丈で、直截に云へば「我に一言の情かけ玉へ」との意である。「負へる日傘」は鐵幹子の「河越すに紅の脚胖の紐を細き母が負はせし秋の日傘よ」から來たのだ。



朝の絹に残し、興は水よ問ふな秋にえたへぬ色なき百里（鳳晶子作）  
同じく旅の繪師である。

昨夜の宿に今朝残した晝の出来榮えを問ふ勿れ、百里の山河亦秋にあひて色も匂もな  
いではないかと、秋荒涼の意を畫家にかりて寫したものの、

さびしさに宿を立ち出で眺むれば人こそ見えぬ秋は來にけり

見渡せば花も紅葉もなかりけりうらのとまやの秋の夕ぐれ

心なき身にもあはれはしられけり鳴たつ澤の秋の夕ぐれ

吾人は徒に古を排して今を頌するものではない。只右の古歌にも見らるゝ如く秋はさ  
びしいものと鑄型にはめた様な短歌界に於て、此女史の作の様な清新の趣味の浸入し  
つゝあるものを、尙世人は吾人が新派崇拜の筆を捨てぬを咎むるであらうか。

「絹に残し、興」と云ひて、一語の繪を云はず、三句目忽焉水を點じ來つて「水よ問ふ  
な」で舟中の客たるを想はしめ、葦かれ眞菰かれ遠い孤村の森も亦枯れ、うつすりと  
川霧が立ち迷うて、うら悲しい物さびしい秋の江村の景色を叙する爲、「秋にえ堪へぬ

色なき百里」の句を結んで、聲調優麗詞句洗鍊の妙を盡して居る。

水よさは秋はもの皆わりなきに竹をめぐりて何地行くらん（與謝野鐵幹作）

「竹をめぐりて何地行くらん」は佳句だ。

待ち玉へ我は旅路を重ね來て來し東にも其歌きし（靈の子作）

不遇の子が流遇の旅。歌は人生の煩悶を歌ふたものであらう。歌ふ人は之れも同じく  
落魄の青年詩人である。日は夕ぐれ場所は郊外の草長い野原。其處の石に裾して二人  
のうらふれ男が一夜を何に語りあかしたであらう。

のりかれぬあると知りてのる駒のまたたゆたふよ若草のもと（佐々木信綱作）

春日の若草を踏で旅に出た若人は、乗りなれぬ駒の動すればたゆたひ勝であるのを、  
頗る困る事と思つたのであつた。

のどかなる雲雀の聲よ春風よ我のる駒の鈴の響よ（佐々木信綱作）

一里二里と進むうちに人はなれ馬もなれた。雲雀の聲と鈴の響と相和して春風の野を  
賑はして居る。

世の中の富よはまれよそは何ぞかすむ野道の馬の上の我（佐々木信綱作）  
先刻程まで鞍壺にしがみついて居た馬上の達者も、駒の足搔の稍平かなるに心れざり  
顧盼して意氣を示すのであつた。惜しむべし若人より先に「富よはまれよそは何ぞ」と  
諦悟した賤の男は、鍬の手もとめずに勤むので、折角の旅振りも夫子と影法師との外  
に見返したものはなかつた事よ。

春の日のゆくらくとゆく駒のたてがみの上に櫻花ちる（佐々木信綱作）

花爛漫の樹下に勿來の關の昔を偲び

法の師に法の道さゝ馬追に馬の事さくけふの旅かな（佐々木信綱作）

そして民に稼穡の道を問うた古聖の旨を味つた。

磐城の海ゆふべのあらし雨になりて沖つしはむひに雲みだれ飛ぶ（佐々木信綱作）

駒のあがきも早まつたであらう。が歌人はいつでも歌を忘れないと見えて

よせかへる浪のまに／＼漂ひていづこをはての我身なるならん（佐々木信綱作）  
と人生の行末の尋ね難きを果敢あみ。

雨をいたみぬれたる袂しぼり／＼こゆる山路にきゝすしはなく（佐々木信綱作）

詫びしい雨を雉子と共に泣き、

わらじ賣る村のはつれの破屋に今宵の宿をさく夕かな（佐々木信綱作）

口重き老婆が教へた道を上りつ下りつして、

山道はいつしかつきて立ちのぼる煙さびしき村につきけり（佐々木信綱作）

で一夜の宿を求め得たのである。

「片われ月」「迦具土」「紫」には、旅の歌として事々しく云ふ程のものない。

歌に聲のうつくしかりし旅人の行手の村の桃しろかれな（鳳晶子作）

歌謠ふに巧な旅人、田舎まわりの辻流しでもあらうか。行手の村の娘達の其歌聲に迷  
はぬやうと危ぶんだので、「桃しろかれな」は紅の桃を戀にして、紅であるな白であれ  
と云つた例の隠喩である。

夕降るは情の雨よ旅の君近道とはで宿とり玉へ（鳳晶子作）

薄田泣菫氏亦歌うて曰ふ。

前略

うきはさびしの、

獨り旅。

細き山路の、

夕迷ひ。

旅も情の、

なからずや。

宿らせ玉へ、

旅人よ。」(暮笛集)

あふる、計りの同情は何れにも籠つて居る。

とほつあふみいなさ細江の秋風に月かけ寒く蓼の花ちる (佐々木信綱作)

「旅の歌」と題してはあつたが只叙景の歌である。廣い空間を叙した歌では之迄あげた外に、

一すちの小道の末は畑に入りて菜の花一里當摩寺まで (服部躬治作)

夕川の葦ちる水に聲なくて更に西する厂を見し哉 (與謝野鐵幹作)

一刷毛のそれは上總か春の海光ましろき雲流れ行く (篁碎雨作)

月になりぬ野はたゞ雲に入ると見て羊よふ聲我ながら清き (水野蝶郎作)

眺めやる花野つゝきの夕堤のほりし人のまたまされ行く (窪田通治作)

時鳥嗟峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明け易き (鳳晶子作)

叙景と云ふも多少の主観が現はれて居て全く畫境の歌は稀である。之和歌詠述の用意と俳句口吟の用意とに、少異なる點なので、畢竟十四文字の差が原因である。

西吹きて明日や筑紫のたよりさかん今宵とまりの松前追分 (與謝野鐵幹作)

「水郷夜泊」とでも題しやう、船中の旅である。明日は明日で筑紫の人の噂でも聞くであらうか、今宵は北のはてなる松前追分を聞いたと云ふ、去來定めなき船客の情で「吳越も同舟」おどの意も想ひやられる。「西吹きて」は西風の吹く事を云のであらう。西風が吹いたら東へ行くではあるまいかなど、物理的の攻撃はそれとして「西」と「筑紫」との調和如何に目をとめて欲しいのである。

うら若き隣襖の京の人木枕いかに木曾の夜更けぬ (長谷川濤涯作)

時は秋もくれ行く頃、夜ふけて一しほの寂さを加ふる木曾の宿、水の音、虫の音に眠らぬ二人。「木枕いかに」の一句で情韻生氣の盡きぬところが知られる。

ほとさゝす村雨はれし上嵯峨の竹の宵月戀にはあらずよ（與謝野鐵幹作）  
前に鳳女史の「時鳥」の歌をあげたが、此陳套なる題目をどらへて、新趣味を與へた手柄は天晴である。しかし前の「嵯峨へは一里京へ三里」の歌は。

時鳥平安城を筋違に 蕪村

どの句に據り、後のは

時鳥大竹籜をもる月夜

どの句を種にしたのではあるまいか。

俳句の想を換骨して和歌に持つて來る手段は別として云はぬか、俳句其他のものにも嘗てなかつた想を發明して、直に自家の歌とするよりも劣つて居るは云ふまでもない事である。

「迦具土」には「時鳥」の歌七首ある

我せこが遺物の髪の届きたる雨の夕をなく時鳥（服部躬治作）

皇子の刃に伏して身うせたる夕よりなく菟道時鳥（全上）

斯様に上四句を以つて一の悽慘なる概念を作り、結びの「時鳥」の啼聲の陰悽なるに調和させやうとする。此二概念の調和の上に成立たせやうとの手段は、二百年前俳句に用ひられた慣手段なので。

鞘はしる友切丸やほとゝぎす 蕪村

などをはじめとし、陰悽なる時鳥は俳人が謠ひつくした所であつて、今は

曉の二文渡やほとゝぎす

鉢植の梅の實黄なりほとゝぎす

など平淡の中に趣を傳へやうとして居るのだ。如何に和歌には新らしいと云へ俳句に古いなら、作者の手柄にはならぬと思ふ。七首の中

夕づきの小くらき合歡の下かげに湯あみし居ればなく時鳥（服部躬治作）

のみが眞の叙景的である。

夕貌の下ゆく水に馬洗ひ足洗ひ居ればなく時鳥（與謝野鐵幹作）

同じ程の叙景、差等をつけるは野暮であらう。

時鳥其一聲の玉ならば耳輪にぬきてとは又聞かまし（正岡子規作）  
面白い事を云つたものだ。

くちなはに咬まれし足の古疵の痛む夕になくほど、ぎす（よみ人不知）  
根岸派の人の歌、之れも亦俳句にした方が優つてゐる。

山百合の花をしとねに蛇一つ白きを抱きて岩に眠る神（興謝野鐵幹作）

慙る露骨なる事を謠うて喜んで居た一年前の短歌は、何程幼稚であつたか測られぬ。  
思はずも櫛ふみをりぬ御社を退出る夜の花かけにして（服部躬治作）

春の夜の花の艶なる事と、「櫛を踏む」と云ふなま織やかな事とを二つ并べた歌で、  
身に入しむや亡妻の櫛をねやに踏む 蕪村

の句の悽寥の氣を帯びて居るものと比ふれば、あまり價值あるものと思はれぬ。

白さちりぬ赤さくづれぬ床の牡丹五山の僧の口おろろしき（鳳晶子作）  
此着想は恐くは

閻王の口や牡丹を吐かんとす 蕪村

から來たものではあるまいか。俳句は牡丹の形容にすらすぎぬが、歌は五山の僧徒が  
盛に宗論をやつて居る處と牡丹とを取り合せたので、句と歌と相并立して生命はある  
であらう。

下京や紅屋が門をくゞりたる男かはゆし春の夜の月（鳳晶子作）  
之等も俳趣である。實際慙る句があるか否やは問ふ處でない。

神のさため命のひゞき終の我世琴に斧うつ音聞玉へ（鳳晶子作）  
は云ふまでもなく

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり 蕪村

から來たのである。歌は俳句に劣ること數等。こんな風かたに俳句と和歌との比較研究は  
餘程の興を添へると思はるゝが、今はこれ位にして筆を擱く。

以上歌に臨んで説を吐き、説を吐いて歌を引いた、而かもうここに統一もなく系統もな  
い「新派和歌評論」と云ふが出來上つたのである。

仰ぎ見る御空の星の近くして思のさとの遠くもあるかな（佐々木信綱作）

かはり行く昨日の我身今日のわれいつれまことの我にかゝるらん(同上)  
佐々木氏は今も矢張此口調である。

我せこに簀もちゆきて野にあひてさて又共に虹を仰ぎぬ(服部躬治作)

田草取は泥にまされて黒かりき今日麻刈の妹の白さや(同上)

憊る調子で進まるゝのが、即ち此人の正路であらう、吾人他所乍ら切に其進歩を祝福して止まぬところはそこなのである。

妹といちこ植ゑたるうら庭にいちご實らで草生ひにけり(金子薫園作)

三たびまで蓮さく池をめぐれども佛にあはず有明の月(同上)

薫園子亦依然沖淡なる叙情と瀟洒たる叙景とに、平板なる調子を用ひて歌つて居る。

野に見るは歌によき眉若き君とある一人にならふな秋(鳳晶子作)

誰ぢらす孔雀の雛に名負はしぬ我やおどりの北のねはしま(同上)

「あどけなき戀」「一通りの戀」をさけて、別に一領地を拓かうとして居るらしい。

稻妻は金剛神の夕あらび金の兜をすべりてもえぬ(興謝野鐵幹作)

桐擡けて五彩の鳥を山に見ず秋風我を起す子のあき(全上)

鐵幹子其所謂「自我」の地盤をくづさじとあせつて居る。

賢くも獨なりける逍遙のあゆみ返しつ芥子の花ちる(窪田通治作)

あらはれてありとばかりをこもり水刈りつる草に行方かくさん(全上)

通治子亦自家の立場によつて、低く麗しい調子を以つて、人生の或意味を諒うて止まざらん事を希望する。

只茲に正岡子規子は十年の肺患漸く重りて、五分時間の安樂をさへ望んで得られぬと云ふ、其悼しい消息は子が近作の如何を問ふ事をさへ許さぬのである。

あゝ今後の短歌界は何れ如何なる方途に足を軋しらすのであらう！(完)

(三十四年九月中旬脱稿)

## 新派和歌評論終

明治三十四年十月十四日印刷  
明治三十四年十月十六日發行

著作  
所有

發行所  
發賣元

東京麴町區三番町  
五十三番地  
東京神田區美土代町  
三丁目拾六番地

編輯者

印刷者

印刷所

定價金貳拾錢

郵稅金四錢

東京麴町區三番町五十三番地

上村才六

東京京橋區南紺屋町廿四番地

岡田鍊一

東京京橋區南紺屋町廿四番地

岡田印刷所

鳴阜書院  
集成館

報知記者鹿島櫻巷著

釘裝美麗

趣味津々

# 談叢

第一編九月五日發行  
九月廿五日再版

發行所

東京麴町區三番町  
五十三番地  
神田區美土代町三  
丁目十六番地

鳴阜書院  
集盛館

◎名士藝人寫真版肖像數葉挿入  
談叢は最も他方面に亘つて其談話を直寫せしもの、學說、藝  
話、經歷談、等趣味涌が如し一編掲載の種類は▲坪井博士(各  
國奇俗)▲赤堀氏(平家物語研究)▲デーリラー夫人(日本婦  
人觀察)▲片岡市藏(藝話)▲澤村訥升(同)▲松林伯鶴(身上  
話)▲某老探偵(探偵秘密談)▲近衛公(相撲談)▲常陸山▲若  
柳燕嬢(經歷話)▲紫の身上談▲松旭齊天一▲豊澤新兵衛(名  
人逸話)▲小野五平(將棋談)▲澤村源之助等  
猶附録として江湖逸話を添ふ、文士、藝人の秘密を遠慮なく暴  
露したり、知名の數十家が奇談珍話面目躍如たり  
◎定價金拾五錢 郵税金貳錢





鳴臯書院新刊圖書

◎雨谷一榮庵著 ◎口繪芭蕉翁肖像插入

芭蕉翁

定價金拾五錢 郵税金貳錢

人物の評傳に於ける著者の技倆は世推して獨壇と稱す今や得意の筆を揮つて蕉翁の面目を寫し更に進んで正風體は自然體である自然の滅ひぬ間は正風體は決して滅ひはせぬと絶叫せり  
目次 ◎芭蕉翁の誕生◎正風以前の俳壇◎芭蕉翁の遁世◎芭蕉翁江都に入る◎深川の芭蕉庵◎芭蕉翁の人物◎芭蕉翁の詩想◎芭蕉翁と旅行◎芭蕉翁の交遊◎芭蕉翁の示寂◎芭蕉翁寂後の俳壇◎芭蕉翁の文章

◎勝間舟人著 ◎口繪蜀山人肖像插入

蜀山人

定價金拾五錢 郵税金二錢

著者夙に蜀山の性行を戀ひ其人格學識等或は正面より或は側面より研鑽數年にして此書を成す當に其筆路の婉曲滑脫なるのみにあらず考證の精密あるは從來世に行はるゝ傳記等に比し優に一頭地を抽けるものといふべし  
目次 ◎蜀山の人物◎蜀山の亨けたる教育◎蜀山の言行◎蜀山の交遊◎蜀山の狂歌狂詩及狂文◎蜀山の評判◎蜀山拾遺◎附錄 蜀山百首

文海指針  
青年機關

新思潮

毎月二回 五日、廿日發行

定價金八錢 郵税金一錢

新思潮發刊日猶淺きにも不拘文海の指針たる青年の機關たる當初の宣言に背かずして今日の文壇に貢献しつゝあるは世既に定評あり江湖の才俊幸に愛顧を賜へ

誌友規定

新思潮は毎號投寄の作品に對して差等を付し當撰の諸子を誌友に推撰し本誌の擴張を依囑す

誌友に對しては左の特權を與ふ

一漢詩、和歌、俳句の三種中本人の望みに任せ一ヶ月五首以内無料にて其點刪批評に應ず(返稿を望むものは返稿料

を送るべし)

一鳴臯書院發行の圖書はすべて定價の二割引にて其需に應ず

新思潮投稿規定

自由共和の樂園を以て自ら任ずるの本誌が斯る規定を設けたるは本院に於て發行しある他の雜誌の原稿と互に混亂するの故障を避け最も公平に最も親切に諸君の玉什を紹介せんことを期するに在るのみ

◎用紙は半紙大にして一枚廿行廿四字詰の割合たるべし◎字體は楷書にて認め左右天地に相當の餘白を存すべし◎同一の原稿紙に別種の作品を認むべからず又作品を異にする毎に必ず住所姓名を明記すべし◎投稿は鳴臯書院編輯局宛とし封皮には新思潮原稿と朱書すべし

